
箱庭に花

時沢京子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭に花

【Nコード】

N5804L

【作者名】

時沢京子

【あらすじ】

時は大正、花の咲く頃。

退屈な日々を送る一人のお嬢様に、突然舞い込む恋の話。

一人は精悍な、凛々しい男性。

一人は柔和な、優しい男性。

それぞれが三者三様に互いを想う、じれったくも純愛な物語です。

【他サイトにて掲載あり】

第一章「藤宮の娘」

「今年も藤宮家の梅は綺麗に咲きましたね」
通りすがりにそう話している声が聞こえて、私は振り返り小さな会釈を致しました。

時は大正三年、如月。

江戸の頃に細々と営んでおりました橋渡しがいつしか海運業となり、明治の日清・日露戦争の特需を受けて、今や我が藤宮家は大きな財閥に成長致しております。

尤もその財の大部分を築いた祖父母は私が幼い頃に他界して、今はその息子である私の父が中心となって同じように日々勤めております。更にその跡を継ぐのは私の兄になることは必須のことで、私一人が海運業の何をするでもなく毎日を過ごしていたのであります。

物心ついた時には既に大きな屋敷であったことの幸いなること。その広い庭には沢山の種類の花が咲き乱れ、単調なお稽古の合間にふと見渡す庭の様々な様相に、私の心は幾度も救われていたのです。

今時分のまだ冬の寒い時期には、毎年紅梅と白梅がその豊潤な香を辺りに振り撒いています。先ほどのご婦人がたにしてもそう、高い垣根に花がしかと見えずとも、その香が人々に？綺麗に咲いた？と暗示させるのでしょうか。すべて専属の植木職人のおかげとはいえ、あのようなお言葉はとても誇らしいことです。

私は垣根に沿うように歩きながら、顔を綻ばせておりました。

「梅という名前もまた、美しかったかもしれないわ」

かく言う私は藤宮椿と申します。

年は今年で十六になり、女学校に通うのも大分慣れたものでした。明治の頃に文明開花してより約半世紀、先生は時折ぶらうすをお召

しになるなど、外国の着物を身につけている方もちらほら見受けられます。

けれどそれでも多くの人々は未だ日本の着物を着ておりましたから、私も生まれてこの方外国の着物に袖を通したことはありませんでした。いつも同じように藍の袴に紫の道行、太い三つ編みの付け根に辛うじて藍のりぼんを巻いていたくらいだったのです。

我が家の家紋は藤でしたから、着物の色合いには藍や紫を大変好んだものでした。尚且つ私は椿という名でもあったので、藤色の着物に椿の赤い色を合わせることが多く、この日も紫の道行の下には赤の矢羽嚙矢の着物を着ておりました。

？名は体を表す？とはよく言ったものですが、私の場合には名が色を表し、色が体を表すといった具合だったのです。

「只今帰りました」

私は門の戸口から庭を抜けて、ようやっと玄関へとたどり着きました。

多くの花の植わる庭の奥に我が母屋があります。元々土地はあったものの、このように大きな屋敷になったのは父母が財産を築いてからで、それまでは大変に質素であったという事は、私はただ話として聞くばかりでした。今や重厚たる瓦が屋根を覆い、幅広い引戸の玄関、長い廊下に縁側が続き、古い離れでさえ一つの家として住めるほどです。幼いころには崩れかけていた蔵も、今はすっかり修繕されてその門扉を固く閉ざしております。かつては子ども遊びによく兄と入っていたと知れたら、今では叱られてしまうことでしょう。そんな我が藤宮家を、人々は「よく花の咲いたこと」と揶揄したものでした。何もかもが安泰し、今はちょうど盛り頃。兄とこの次の蕾も沿っているとなれば、日々は何事もなく平穩に過ぎていくほかなかったのです。

「お帰りなさいませ、椿お嬢様」

「ああ、ヨネ。帰りましたよ」

私は音もなく現れて深々とお辞儀をする老婆に、もう一度帰宅の挨拶を致しました。

彼女はヨネと違って、私が生まれる前からずっと仕えている女中です。年齢はとうに六十を過ぎておりましたが、気丈で毅然とした厳格な女性でしたので、私は一度たりともヨネが腰を曲げているところを見た覚えがありませんでした。いつも質素な色合いの小紋の着物に、太鼓結びの帯がきちんと据えられています。彼女は私の乳母にも等しく、いくら主家の娘だとはいえ、彼女に物申すことなど致しかねるものでございました。

「今日の女学校はいかがでございましたか？」

ヨネは部屋へと向かう私の後ろを歩きながら、老婆特有の掠れた声で尋ねます。

「それが聞いて頂戴。今日はお裁縫の時間に素晴らしいものを拝見したの。自動で布を繕う…ええつと…名をなんと言ったかしら…？そう、確か？みしん？といったわ」

「？みしん？…でございますか？」

「ええ、あんなに素晴らしいものは未だかつて見たことがなくてよ。一瞬で繕ってしまうんですもの。この家にも？みしん？があつたなら、ヨネ、貴女の手も休まるものを。いかんせん日本にはまだ数台しかないんですって」

「そんな…滅相もない。この婆には勿体ない代物でございます」

「まあ」

相変わらず謙遜が得意なヨネの言葉に、私はクスクスと思わず笑い出します。父はよく？女性は自慢好きでお喋りなものだ？と申しましたが、ヨネに至ってはそのようなものは皆無でありました。

「先生は？みしん？の素晴らしさに熱弁を振るう余りに、最後にはお馴染みの選挙の話になってしまったのよ。先生は女性の選挙権に関して、とても熱心でいらっしやるわ。これからの時代には絶対に必要なものなんですって。私にはまだ考えも及ばないけれど、ヨネ、

貴女はどう思ってた？」

私は父の言う？女性らしさ？を遺憾無く発揮して、まくし立てるように尋ねました。けれどヨネはそんな私にいつも一言で返すので

す。「聡明な方のお考えは計りかねます」

「そうね…私もよく分からないわ。素性も顔も知らない男性から一人選ぶなんて」

しかしそれだけこの大正の世が平和ということなのでしょう。以前は武勲のある方が多く登用されていたものを、一般の人でも声を上げられるようになったのですから。

明治元年の鳥羽・伏見の戦い、明治十年の西南戦争と、江戸の残り火の国内戦がようやく終わったと思えば、立て続けに二十七年の日清戦争、三十七年の日露戦争と争いが絶えることがありませんでした。

尤も私が生まれたのは明治三十一年でしたから、幼い頃の別の国での戦いは知るところではありませんでしたし、女学校で歴史として学ぶものであったのですが。

「そつえばヨネ、先程…」

「椿さん！」

私は長い廊下の先の襖を開けて顔を覗かせている女性の声に、物言う口を止めました。凜としたお声は私を叱責するものに他ならず、少しつり目でほっそりとした印象的な顔立ちで、こちらを見ておいでです。

「よくまあ…大きなお声でお喋りの過ぎますこと。慎みなさいな」

「…はい、申し訳ありません、お継母様」

継母は私の言葉が終わるか終わらないかというところで、ぴしゃりと襖を閉じてしまいました。

継母は名を総子（しんこ）とあって、父の後妻でした。

彼女は実母が存命であった頃からの父の愛妾で、実母の亡くなっ

た折そのまま藤宮に迎え入れられたのでした。父は総子さんが、幼かった私の母代わりになればと思う節もあつたのでしようが、まこと血縁あらざる事の大きなこと、私にはどうしても総子さんを母として見る事ができませんでした。それは大きくなればなるほど違和感も増すもので、最近では彼女を継母と呼ぶことすら躊躇うこともありました。彼女を私の中で最も適した位置付ける、より良い呼び名がないものかと、そのたびに苦心するのです。

私は小さくため息をつきます。

「お気になさつてはなりませんよ、椿お嬢様」

ヨネはひそやかに私に囁きます。私はそれに微かに微笑み返しましたが、ヨネはこのような時、決まってこう申すのです。

「あれは名前に花を持たぬ故、花の気持ちに分からんです。それなのに百合から生まれた椿の事を、どうして分かりましょうか？」

「そう…ね」

私の実母は名を百合江といました。さる華族の長女として生まれ育ち、それこそ百合の花のように色白で、唇は紅をさしているかのように仄かに紅く、父との見合いのほかにも沢山の縁談を持ち込まれたといえます。そして十五の折に、藤宮家との政略を踏まえた上で嫁いで来たのです。

けれど私が幼かった頃のある冬の日に、小さな風邪をこじらせてあつという間に亡くなってしまいました。ヨネは元々藤宮家の女中ではなく、母の実家に仕える者でしたから、母を小さな頃から知り、またその結婚のいきさつもよく知っておりました。

だからこそ父の真意を知ってはいても、後妻の総子さん疎ましいことこの上なく、彼女が継母でありながら、実母亡き後を我が物顔でいることが大変に許しがたいのです。

けれど…

「…けれど、お継母様もお可哀相な方だと思つたよ」

私は声を潜めて呟きました。藤宮家は一種の習わしのように、名前に花や植物の名を持つものを迎え入れたり、生まれた子に名付け

ることが常でありました。

亡くなった祖父は柳吉郎、同じく祖母は竹、父は蓮太郎といった上に、前妻は百合江、継子の兄妹は蘭太郎と椿、本来藤宮家とは関わりのないはずの女中でさえ、奇しくも名を米と申せば、一人それから外れている疎外感は大変なものでしょう。

総子さんはご自分の事を決して明らかにすることはありませんでしたが、その生まれはどこか小さな農村だろうとヨネは言うのです。両親に間引きされ、女郎屋に入れられたところを父に見初められて愛妾になったのだろう。他に帰る場所などとうにないのだろうと。

祖父母は父が華族出身の母と婚姻関係であることが、藤宮財閥の将来を左右するとお考えでしたから、総子さんには普段から辛く当たっていたのでしょう。二人の命日が近づく度に、謔言のように祖父母の位牌に許しを乞い続ける継母の姿は、幼心に胸を締め付けるものでした。

そう…それを幾度となく見ていた私は知っていたのです。

いくら私に敵しくなさってはいても、継母がかつて身を斬るように必死になって、父と愛し愛されようとしていたことに。そのように一途なお心に、父も見初めたのでしょう。

「お嬢様はお優しゅうございますな」

「いいえ…」

いいえ、私はただの世間知らずに過ぎません。

生まれた時には家は既に財閥で、私は所謂箱入り娘でございました。何をせずとも祖父母や両親に愛され、ヨネが世話をしてくれました。嫌と思うことが何一つなかったということは、自然とすべてを愛していたことに他なりません。そうやって何不自由なく育ち、継母の味わった苦心や努力を何一つ経験することなどありませんでした。

継母からしてみれば私など、いくつになっても赤子同然なのでしよう。

不意にポーンポーン…と大時計の鐘が三つ鳴りました。

「…本日はお琴の時間にございますな。もうじき先生がお見えになりましょう」

「そうね」

私は少し早足で自室に向かいました。木扉に据えられた真鍮の取っ手に手をかけます。

「着替えたらすぐに参ります。先生がお見えになったら、いつもの部屋にお通しして」

「畏まりました、お嬢様」

ヨネはまた深々と頭を下げました。

彼女は私が部屋に入るまで頭を上げぬことを知っていましたから、私は？お願いね？と言い足して扉を閉めました。

こうして毎日毎日、私は何かの習い事。

華道・茶道・箏道・日本舞踊…そうして様々な道を嗜む事が、私の義務でした。

けれどいつまでこうして過ごすことでしょうか。私は今年で十六、母・百合江が藤宮に嫁いできた齡を過ぎてしまいました。父の庇護の下、退屈と申しては罰が当たりますが、何か物足りない心持ちであつたのです。例えば継母のように、苦しみながらも誰かを一途に想うことにすら夢を見ていました。

毎年同じ時期に花は咲き、散つていきます。

そして冬を越し、また同じように巡るのです。

私も同じ輪廻の中におるのでしょうか。私は広い部屋で一人ため息をつきました。

同じ花なら思いを全て種に託して、どこか知らない庭へ参りたいものです。それが叶わぬのなら、違う種の舞い込むことを。そうして何か一つでも心躍ることを待ち望む毎日だったのです。

そんな梅の盛る頃、
安寧な日々のごとくございました。

第二章「伊集院の息子」

その日も同じように、私は女学院からの帰り道を歩いておりました。

この頃は日なたにいればポカポカと暖かく、俄かに春の気配さえ感じられます。しかし季節は未だ如月の半ば、道行は今暫く手放させそうにはありません。今この時の春めいた日差し以外には、変わったことなど何一つないようにすら感じられます。それというのも先日お裁縫の時間に？みしん？を拝見してからというもの、それ以上目新しいものに出会うことがなかったためでした。

毎日同じ、平坦な日々…私はどこか虚いだ気持ちを抱えながら、ぼんやりと歩いておりました。

女の一生が殿方に嫁ぎ、家事・子育てに勤しむもので、それ以上でもそれ以下でもないことはよく存じてはいたのです。様々なお稽古も、どの家に嫁いでも恥ずかしくないよう身につけるものに他なりません。日常に潤いを求めるものとは、また違う次元のものなのです。父やヨネが私に言って聞かせたように、私はちゃんとそれをわかっておりました。

…だからそれでも良かったのです。

規律正しく平穩に過ごすことが何よりならそれで構いませんから、せめてこの胸高鳴ること一つ、望ませては頂けないものでしょうか？

「きやつ…」

そんな心持ちで歩いていたら私は、曲がり角に差し掛かって出合い頭にどなたかにぶつかってしまいました。反動でどさりと音を立てて、手にしていた書物が地に落ちます。

私はその落ちた書物に、あまりにもぼんやりとしていた自分を顧みて、思わず赤面致しました。上の空で公道を歩くなど言語道断、

いつどこでどなたの目に触れているかも分からないのに…とヨネの

言葉がよぎります。

「あ…も、申し訳…」

「いえ…」

慌てて屈んだ私よりも早く、すっと相手の方の手が延びてきて落ちた本を拾いあげました。

「私がぼんやりとしていたためです。大変失礼致しました」

私はそう言われて差し出された本よりも、思わずその方のお顔をじっと凝視してしまいました。

すらりとした長身に、流れるように分けた短い黒髪。切れ長の瞳が細見のお顔にとてもよく似合いで、鼻筋はすつと通り、見とれるほどに整ったお顔立ちをしておいでです。お召しになっているのは外国の着物で、普段着というよりも何かの正装のようにも思われました。

「お怪我はありませんか？」

「あ、はい。大丈夫です…。」

私は消え入るような声で咳きながら、やっとのことで本を受け取ります。そしてそれを抱えるようにしながらもじもじと、顔を上げることもすらかないませんでした。ただでさえとても素敵な殿方で、しかもそんな方にぶつかってしまったのかと思うと、ひたすらに気恥ずかしい気持ちでいっぱいだったのです。

けれどその方はそんな私を疎むことなく、低く心地よく響く声で「女学校からのお帰りですか」とお尋ねになりました。

「は、はい…」

「ではこれも何かの縁でしょうから、貴女の家までお送りしましょう」

「い…いいえ！いえ…結構でございます…！」

私は驚きと恥ずかしさのあまり、大変に不躰な言葉を返してしまいました。激しく首を横に振ったので、三編みがるで犬の尾のように揺れ動きます。継母やヨネが見聞きでもしたなら、何と云って私に苦言を呈することでしょう。真っ赤になった顔面に、額にはじ

わりと汗が滲むようです。

しかしそれでもその方は、微笑みながらおっしゃるのです。

「…ではその角まで。それで差し支えありませんか？」

私は顔を上げて、その方の指す方向を見遣りました。

とあるお屋敷の長い垣根を沿っていく道、それは私の家へと続く道に間違いありませんでした。しかしいつもと違い、その道がひどく長く見えたのです。見知らぬ男性に道すがら同行を求められるという、ある種の試練ともいえるのでしょうか。

けれど私はあえて「はい」と承諾致しました。先程あれほど失礼な返答をしておきながら、今ここでこのお誘いを断つては、藤宮の娘として大変に無礼だと考えたのです。

「良かった。ではそこまでお供しましょう」

その方はニコリと微笑むと、手で私を促してゆつくりと歩き出しました。私は尚も顔を上げられず、ぎこちなく歩を進めます。

「女学校ではどのようなお勉強をなさるのですか？」

その方は私の緊張を緩和させるようにと、相変わらず落ち着いた声で尋ねます。

「唄やお裁縫や…文学などを。日によって学ぶものは異なります」

「それは楽しそうですね。一組には何人ほど？」

「じゅ…十五名前後ですわ」

私は質問に答えながらも、内心早鐘のように動悸がしております。沿うように長い垣根のどこかから、誰かに見られてしまったらと思うと気が気ではありません。

勿論横を歩くこの方は、私には勿体ないくらい素敵な男性ではございません。

しかしそうであればあるほど、私の口は紡がれ、足取りは覺束なくなり、ますます約束の角が遠くに感じられるのでした。

「…女性にとって…」

そんな私との暫しの沈黙を置いてから、ややあってその方は静か

に口火を切りました。

「女性にとつて、結婚とはいかなるものでございましょう？」

「…え？」

あまりに唐突な問いに、私はつい小首を傾げました。一体今この方が何をおっしゃったのか、一度考え直さなければならぬほどだったのです。

しかしその方は流れるように目線を私に合わせて、その答えを促します。私はそれを受けて一度呼吸を落ち着けると、初めてその方をきちんと見て申し上げました。

「結婚は…女の幸せと申します」

そうではなくてはならないと、ヨネはいつも口にしたものです。実母にもきつと、そう言い聞かせていたことなのでしょう。

「ではそれが親同士の決めたもので、互いに顔も名前も知らないものであつたなら…？」

その方は立ち止まって、今度はしかと私に向き直りました。私も足を止めてその方を見上げたまま、二の句を心中で探します。少しだけ悲哀を滲ませたその綺麗な一重の瞳に、私はこの方の真意を汲んだのです。そしてご自身のことよりも、同じ境遇で嫁いでくる相手の方を何よりも想っていらつしやるのだと。

私は何と言つて言葉を返すべきか、ひどく迷いました。

もし私の立場なら、何の胸の高鳴りもなく突然結婚することを、少なからず嘆いたことでしょう。けれどこんなにも深く配慮してくださる方ならば、その結婚もまた幸せなのではないかと思つたのです。

その間も、その方の目線は私にじつと注がれておりました。私の言葉を待つてくださっているのは分かつて、この方が今望んでいるのがどのような答えなのか、私にはどうしても分かりませんでした。その悲哀を拭つて差し上げたたくとも、気休めがより一層傷を深くすることもありません。

私の心には、何一つふさわしい言葉が浮かんでは来ませんでした。

いつそ泣いてしまいたいと思えるほどに、非力な自分を感じざるを得なかったのです。

「坊ちやま！」

するとその時、どこからか小男が一人、こちらに駆けて参りました。痩せて頭の禿げ上がった背の低い男でしたが、その身なりや振る舞いにはどこか上品なものがありません。

「こちらにおいででしたか、坊ちやま。急がねば省に遅れますぞ」「ああ、分かっているよ。だがいい加減、その呼び名は止してくださいか？」

その方は悲哀を一瞬で消し去って、小男に苦笑いを向けました。少し恥ずかしそうに、けれど小男にそう言いつけるのが若干気後れするような、そんな口調でした。

「幾つにおなりでも、坊ちやまは坊ちやまにございまする」

そう深々と頭を下げた小男に、その方は？敵わない？とおっしゃいました。きっとこの方々は、私とヨネのような関係なのでしょう。私はそれを思うと、先程まで泣き出しそうだったことも忘れて、小さくくすりと笑ってしまいました。

「やっと笑ってくださいましたね」

その方は私の表情を見遣って、とても嬉しそうにおっしゃいました。私は自分の顔が耳まで赤くなるほど、熱くなるのを感じました。

「坊ちやま、この方は…？」

「道すがらお会いした方だよ。先程は唐突に大変失礼いたしました」「い、いいえ…！そんな…」

私はまた無作法に大きく手を振って、直後にその事をひどく後悔しました。いつもなら場を繕うことなどたやすくできるものを、なぜか失態ばかりを繰り返してしまいます。

「ご縁がありましたら、また」

そう囁きかけるようにおっしゃると、その方は急かす小男を従えて車に乗り込んで行きました。

私はその背中を見送りながら、しばらくその場に立ち尽くして、顔の火照りが冷めるのを待たなければなりませんでした。

あの方は一体どなただったのでしょう。

私はとぼとぼと帰路を歩きつつ、あの方の名前すらお聞きしなかつたことを気に病んでおりました。顔の火照りも大分治まり、痛くなるほどの動悸も成りを潜めています。

あの時の息苦しさは今まで感じたことはなく、平常とは程遠いものではありませんでしたが、今となってはどこか満たされた気分でもありました。今までに感じたことのない心持ち、あれほど痛いものであったにも関わらず、何故かもう一度起こることを望まずにはいられません。

「ご縁がありましたらまた」…その折りにはお名前を伺えるでしょうか？

けれどその時にはきつと、一蓮の伴侶がいらっしやることでしょう。この淡く曖昧な胸の痛みはこれきりにするべきなのだと思うと、私はますます頭を垂れるばかりでした。

そんな心持のまま家に帰ると、玄関に緑の鼻緒の草履があるのを見つけて、私は松江叔母様がいらしているのだとすぐに分かりました。

松江叔母様は父のお姉様に当たる方で、私が椿の赤い色の着物をよく着るように、松江叔母様もそのお名前にあやかって深緑の着物を好んでお召しになっていたのです。元旦でも盆でもなく叔母様が

お見えになるなんて、大変に珍しいと思いつつ、私はご挨拶申し上げねばと客間へ真つ直ぐ向かいました。

途中やってきたヨネに本と道行を託し、松江叔母様特有のきつぷのいい笑い声の響く障子の前で「失礼致します」とお声をかけました。

「あら椿さん、お帰りなさいまし」

「はい、ただいま帰りました、松江叔母様。その後お変わりなきよう拝見致します」

そう定例的なご挨拶を申し上げると、松江叔母様は「そうね、シワが一本増えたくらいよ」と、また高らかにお笑いになりました。

父の後ろに控えるように座っている継母にはそれが耳に障るようで、微笑みは口元だけに留まっているように見受けられます。尤もおおらかな松江叔母様のこと、私は彼女が継母に辛く当たる場面を一度たりとも目にしたことはなかったので、元々物静かな継母の性格に合わないことが不機嫌の理由なのだろうと考えておりました。

「ではどうぞごゆっくり」

私はそう言つて早々に退室しようと致しました。

大人の会話に長く居座るなど、はしたないことこの上ありません。けれど今日に限つては父はそんな私に、部屋に留まるようにとおっしゃいました。

「ちようど貴女の話をしていたのよ、椿さん」

松江叔母様のお言葉に私は小首を傾げましたが、言われるままに室内に入り込んで障子を音もなく閉めました。松江叔母様はそんな私に、いつも以上に楽しげに微笑むばかりです。

「椿さんもちようど百合江さんが嫁いできた年頃になりましたね。ますます目元の似てきたこと」

「え、ええ……」

私は部屋の対極に位置している継母の眉根が動いたことに、内心臆病な動悸を覚えました。継母は母・百合江の名を耳にすることを、平素大変に嫌がっていたのです。父は勿論のこと、私もそれを知つてから母の名は極力口には致しませんでした。

ただ一人ヨネだけが、文字通り母の名残だったのです。

けれどそれにも気付かず、松江叔母様はお話を進めます。

「蘭太郎さんもそろそろ嫁御を貰う頃だし、椿さん、貴女ももう適齢期でしょう？だから貴女に良い話がないかと探していたのよ」

「私に…ですか？」

「ええ、そうしたら聞いて頂戴。とても素晴らしい縁談を頂いたの。ちょうど貴女にぴったりだと思ふのよ」

そう言つて松江叔母様は、益々につこりと満足そうに微笑みます。生来の世話好きである松江叔母様は、半ば一方的にそうおっしゃると、いそいそと傍らに置いたご自分の荷物を探り始めました。

私はそれを目の端で捉えながら、同時に帰り道のあの方を思い出しました。

奇しくも見知らぬ女性との婚約を思わせた方…あの方が口にした「親の決めた互いを知らない者同士の結婚も幸せか」というお言葉がよぎります。そう問われていなければ今このように、戸惑うわけがなかったのです。

常日頃に何か一つ胸の高鳴ることを…、その望みを果たすのに結婚話はうつつけだったのですから。

私は思わず松江叔母様に申し上げます。

「け、けれど…顔も名前も知らぬ者同士、ご縁がありますでしょうか…？」

今ならあの方のお気持ちがよく分かります。いえ、あの方にお会いしたからこそ分かるのでしょうか。

そのような結婚もまた、幸せになれるものなのかと。

「まあ、椿さんったら。お互いのことはこれから知り合えば良いのよ。それに私に縁談が振られたこと 自体がご縁そのものだ、私はそう思ひましてよ」

「そうだな、椿。お会いする前から気弱な事を申しては、先方に失礼だろう」

「…は、はい」

松江叔母様と父にそう言われて、私はただ頷くしかありませんでした。

ああ…まさか私にもこのようなことがあるとは。一刻前には予想だにしておりませんでしたのに。

名前もお聞きできないままに別れたあの方が、私に何かをもたらしたのでしょうか。いえ、あの時即答出来なかった時点で、既にこうなるよう向かっていたのかもしれない。

ほんの少し前だというのに、あの時の私がひどく浅はかに思えてなりませんでした。

「まあ…椿さんがそうお思いになるのも、致し方のないこと。けれど安心して頂戴。相手の方はとても素晴らしいお家柄で、このようなものをお預かりできたの」

松江叔母様はそう言って、荷物の中から探り当てた真四角の風呂敷包みを解きました。中からは桐の箱、そしてさらにその中に恭しく納められていた一枚の写真を取り出しました。

「ほら、これが相手の方よ」

差し出された写真を手にした瞬間、私はあつと息を呑みました。

細見の顔立ち、流れるような単髪、すらりとした長身は、つい先程連れだつて歩いたあの方そのものだったのです。

「お名前は伊集院祥助様。御祖父様はあの鳥羽・伏見の戦いで闘神と畏れられて、御父上も日清戦争で武勲をお挙げになつているのよ。祥助様ご自身はまだ戦いに参じたことはないのご謙遜なさるのだけど、親子三代、陸軍省にお勤めになつていて、祥助様はその中でもとりわけ優秀なのですって。大正の世にあつても、お血筋は武家そのものでいらつしやるのね。あら、椿さん。どうかなさつた？」

写真を見つめたまま、松江叔母様のお話を半分にししか聞いていない様子に、私は虚をつかれました。

よもや先頃偶然にもお会いしたと言えるはずがありません。私はただ平静を装つて、「何でもございませぬ」とお答えするのが精一

杯でした。

「近々お会いしてはどうかしら？こんなお話滅多にないもの。そうですね…次の大安は何日でしたっけ？」

そう嬉しそうにしている松江叔母様のお声は、私の耳に全ては届きませんでした。あのひどく傷む動悸に、体全体までもが震えだしてしまいそうです。

どうしてそれをとどめることができましょう。

写真の中の精悍なお顔立ちと、あの方がおっしゃっていた相手が実は私だったのだと思うと、私は再び顔の熱くなるのを覚えるしかなかったのです。

第三話「植木職人の弟子」

それから数日後、私は庭に出て梅の木の下にありました。

梅はちょうど満開を向かえ、その一瞬一瞬が惜しく思えるほど美しいものでした。芳しい香が辺りを包み、時折花びらがひらひらと落ちて参ります。

けれど私はそんな梅の木の下に先、冬晴れの高い青空をどこともなく眺めておりました。

あれから私の心は祥助様のことですばいでした。

祥助様はあの時おっしゃった相手というのが私だと、お気づきになつて居るのでしょうか？

もしそれとは知らず、今もお気に病んでいらつしやるのではと思うと、大変に心苦しく感じるのです。

「お嬢様、そろそろ華道の先生がお見えになります」

不意に背後にヨネがやってきて、私はやっとのこと空から目を逸らしました。

するとその目に映しておかなかったことが悔やまれるほどの梅が、改めて飛び込んできたのです。その美しさは、心の不安の何もかもを洗い流して忘れさせてしまうほど。この心苦しさを、梅の花の美しさにとらわれてしまいます。

「そうね…じき部屋に戻るわ。…それよりこの梅を今日のお稽古に使えないかしら？ヨネ、貴女にあの枝をとれて？」

「それなら僕がとりましょう」

突然に聞き慣れない男性の声飛び込んで、私とヨネは驚いて声の方向を見遣りました。

そこには年の頃二十と思われる単身瘦躯の青年が、にこにこ微笑みながら立っております。すこし色素の薄い髪の毛はただざんざりにしたただけのようで、あちこち好き勝手な方向を向いています。

「あの辺りの枝でよろしいですかい？」

「え…ええ…」

私は彼のごく当たり前といった振る舞いに、ついどなたなのかを聞きそびれてしまいました。けれど彼は何も気にする様子はなく、手慣れた手つきで梯子をかけて登っていきます。

ふと彼の背中を見遣りますと、その着ている植木職人独特の羽織りの背中には、「七」という文字が書いてありました。それは藤宮家専属の植木屋？七枝屋しちじや？の屋号で、羽織そのものは幼いころから見慣れたものではあったのですが、この青年自体はまるで知らない方でした。

「このくらいでいかがです？」

「ええ…結構ですわ」

そう返事を致しますと、七枝屋の青年は幾本か梅の枝を携えて、梯子から降りて参りました。そして最後の一段をポンツと飛び降りますと、無邪気な笑顔で私に枝を差し出すのです。

「はい」

「あ、ありがとうございます」

青年に花を渡されて、私の方が逆に戸惑ってしまいました。彼はただ満足そうに私に微笑みかけています。未だかつて、このように男性が純粹に微笑みになるのを見たことがあったでしょうか。

私は思わずこの青年を見つめ返すばかりです。

「…おーい、良よい！」

すると玄関先からこちらに向かってくる声が聞こえてきました。

聞き慣れた江戸っ子気質のしわがれ声の主は、紛れも無く七枝屋の老頭領でした。白髪はすっかり抜け落ちて、年々上背がなくなっ
てきています。子供の頃には険しく見えたその顔だちも、今ではぎ
よろりとした大きな目を残して、すっかり優しいものになりました。
大分歳を召されてはいるのですが、ヨネと同じくしゃんとしてい
らして、軽い足取りでこちらへ走って参ります。

「どうも、椿お嬢さん、女将さん。うちの若えのが粗相をいたしやせんでしたか？」

「いいえ、私のために梅の枝を取ってくださいましたわ。それより……」

「この方はどなたです？と尋ねようとして、私は一度言葉を止めました。折角善意でしてくださったのに、私が追及したこと？まだ名乗っていないのか？とこの方がお叱りを受けてはいけないと思つたのです。するとヨネがそれに気がついて言葉を続けます。

「頭領、お若い方を採りましたんで？」

「いやなに……恥ずかしい話、アタシも歳を取りましたんでね。今七枝屋の跡継ぎにと鍛えてんでさ。中々筋は悪くねえんで……おい、良お前え椿お嬢さんに挨拶はしたのか？」

「あ、まだでした」

青年はそう言つてまた何も悪びれずに微笑みます。それを見て？こいつあ間の抜けてるのがいけねえ？と、頭領は苦言を漏らししました。

「初めまして、椿お嬢さん。僕は畠山良太郎と言います」

「あ……藤宮椿と申します」

そうして一種の癖のように深々と腰を折りますと、良太郎さんはぺこんつと愛嬌のあるお辞儀を返してくださいました。その一挙手一投足が、私を呆氣にとらせませす。しかしそれでも嫌味などは微塵も感じられません。

「なにぶんまだ鍛え始めたばかりなんでえ、至らないことも多いかと思ひますが、どうぞご贔屓にしてくんなせえ、椿お嬢さん」

「いいえ、とんでもない。藤宮の庭から、また一人腕利きの植木職人が育つていくのかと思うと、とても誇らしいことですわ」

「ありがとうございます、お嬢さん」

私の言葉に、良太郎さんは？へへへ？と少し鼻の頭を搔くようにして微笑みました。その照れたような表情がまた私の目には新鮮で、柔らかな笑顔に僅かにとくんつと胸が鳴つたのが分かりました。

「さ、お嬢様。まもなく先生がいらっしゃいます」

私はヨネに促されて彼女に梅の枝を渡しますと、軽く会釈をして名残惜しく思いつつも母屋へと歩き出しました。その間、良太郎さんは頭領に並んで私を見送っていてくださいました。

そして玄関に入る前にもう一度振り返りますと、良太郎さんはそんな私の目線に気がついて、満面の笑みをお浮かべになったのです。私は途端に動悸を覚えて、はっと胸に手を宛がいました。

その胸の小さな高鳴りは、そう、まるで梅の花のように淡く甘いものでございました。

「よう生けてござりんす、椿さん」

私を手を止めて姿勢を正しますと、華道の池上先生は一言褒めてくださいました。

池上先生はヨネよりも年上の方でしたが、すらりとした美しい身のこなしは未だ健在で、白髪おくしの混じるその御髪おくしさえ芸術品のように思われます。

その立ち居振る舞いに、今までどれだけの男性が魅了されたことでしょうか。

お若い頃、吉原にいらしたという池上先生は、お年を召してもなお若干の女郎言葉おしよくをお使いになります。

かつて御職おしよく・池芳大夫いけよしだゆうとして吉原一と謳われた、その気品はいかなる花も敵わないほどです。元々華道は嗜んでいらしたのか、吉原をご隠居した後は、紆余曲折を経て華道の師範となり今に至ります。花も池上先生に生けられるのなら本望のように思われてなりません。

「されど…何か悩みでも？」

一呼吸ののち、突然に池上先生にそう言われて、私は花を見つめていた目を思わず先生に向けました。

悩み…今の私の心を、そんな綺麗な言葉で言いくるめて良いものなんでしょうか。

心では未だ祥助様を想い、その一方で脳裏には先ほどの良太郎さんの笑顔が浮かんでいる…そんな二つの心が私の中にはあるのです。そのような心持ちでは曇るものもあつたのでしょうか。

池上先生にはきつとそれがお分かりになつたのです。

「…申し訳ございません、先生」

私は頭を垂れて、自分の不届きを詫びました。しかし池上先生はにっこりと微笑んで「ようござりんす」とおっしゃるのです。

「いかなる花も正直なもの。悩みを持つてはならぬということではありせん。私はむしろ今日のお花は大変に美しいと思いますよ。今まで良くも悪くも綺麗に枠に嵌まつていたものが、今日のは少しそれを外れて椿さんらしく見えます」

「池上先生…」

「冬を越して花が咲くものならば、寒中に咲く花はより美しいものになりんしょう。この梅と同じでありんす」

先生はそつと残りの梅の枝を手に取りますと、質素な生け花をあっという間にこしらえました。

「次にはどのような花の咲くのか、楽しみが増えました」

そう言つて上品に、けれどどこか悪戯な雰囲気を含めて池上先生は微笑みます。

恋多きと言われた頃に、同じような思いをなさることがあつたのでしょうか。

しかしその真相の一端さえも私に掴ませないままに、「今日の所はこれにてお暇します」と、相変わらず優雅にお立ちになりました。お見送りする門前までの長い道程は、いつもなら池上先生との会話を名残惜しくさせるものでしたが、今日ばかりはこの曖昧な心持ちに口を紡ぐばかりです。

池上先生は花魁時代の身の上をあまり話すことはありませんでしたが、右手のその古い傷が残る動かぬ小指に、私はただ命を賭けた

ものがあつたのだと悟るのです。

多くの男性との関係を持つ花魁は、その心の一途の証を細い小指に託すのだといいました。そしてその証を心に決めた方に渡すのだと。

切り落としきれなかった池上先生のその想いも、今の私と同じように曖昧だったのでございましょうか。けれどそれを尋ねるにはまだ私は浅はか過ぎるように思われて、いつになってもただ先生の小指を見つめるばかりでした。

「お寒うございますから、ここまで結構でありんす」

池上先生は門を一步踏みいでて、小さな会釈と共にそう私におっしゃいました。

「はい、池上先生。お気を付けてお帰り下さい」

私は深々と頭を下げて、池上先生が角を曲がって見えなくなるまで門前に立つておりました。

池上先生の仰つたとおり、如月の冷たい風が緩急を伴って吹いて身ぶるいさえも感じます。庭からは未だ七枝屋のお二人が作業をしているのか、軽快なパチッパチッと剪定の音が聞こえてきました。

もう日も隠れる頃ですから、今日の所は十分ですよと申し上げますか。

「藤宮…椿様…?」

「はい…?」

私は不意に背後から呼ばれ、何の気もなしに振り返りました。

そして直後にその声が聞き覚えのある低く心地よいものだとすることに気付き、またその精悍なお顔立ちに大きく胸が高鳴ったのでした。

「い、伊集院…祥助様…」

あの帰り道で、そして松江叔母様のお持ちになった写真で拝見した方。

途端に私の胸は早鐘のように激しく打ち始め、真っ赤な顔で俯い

てしまいました。

「驚きました。まさか貴女だったとは」

やはり祥助様は、ご結婚の相手が？藤宮椿？とは聞き及んでいても、よもや私であったとはご存知ではなかったのです。

「も…申し訳ありません…」

「何故謝るのです？」

消え入りそうな私の言葉に、祥助様は小首を傾げて尋ねます。とてもお顔を拝見できる状態ではありませんでしたが、耳に聞こえてくるのはとても落ち着きのある優しいお声でした。

「祥助様があの帰り道の後も、きつとお気に病んでいらつしやるだらうと…。私はその後すぐに、叔母に貴方とのご縁を聞きました。

けれど貴方一人が、ずつとお気の毒にされているのではないかと思うと…」

すぐにでも結婚のお相手が私で、祥助様のご心配が無用のものであるとお伝えしたかったのです。

けれどどうしてそれが出来たでしょう。

お名前とお顔がわかったところで、お住まいがどちらかも知れないのに。そしてそれに託けて庭で呆けていたことに、ひどく罪悪感を覚えていたのです。

「やはり貴女はお優しい」

祥助様はそんな私にっこりと微笑みかけてくださいます。

「お気づきではなかったでしょうが、あの日私の尋ねたことに、貴女がすべてお答えにならなかったことが、私にとっても救いでもあったのです」

「…え？」

「顔も名前も知らなかったのだとしても、結婚が女性にとって無償の幸せと言われたならば、私にはとても荷の重いこととございました。或いははつきりそうだと仰られても、あの場では仕方のないことは承知していたのです。…まだそれとは知らぬうちでしたからけれど、貴女はそうはなさらなかったでしょう？」

私はよく真意を飲み込めぬままに、小さくうなずきました。

「幸せの一端を相手に預けてくださる方と想ったのです。共にそうなるようにと、歩んでくださる方なのだろうと」

祥助様は顔を綻ばせながら、いい思い出を心に描いている時と同じ表情で仰いました。

ああ、そんな滅相もない。

ただあの時はお馴染みの優柔不断にのまれて、言葉を詰まらせてしまっただけだというのに、まさかそのようにお思いになってくださったとは、到底思いもしなかったのです。

私はますます俯きました。

折角祥助様がお褒めになつてくださっているのに、自分がそれにふさわしい人間だとは思えず、気恥ずかしい心持ちがしたのです。

しかしそれを受けてか、祥助様はなおも言葉を続けます。

「ですから、どうか？ 藤宮椿？ という方が貴女のような方であればと願っております。実の所、今日は失礼を承知で結婚相手のお姿を垣間見られればと思つていたので。そうして再び貴女にお会いできて、この上なく嬉しく思います」

だからお気になさることは何もないのですよ、と祥助様は未だ顔を上げられないでいる私を諭してくださいました。

相変わらず立ち居振る舞いの美しい長身に、今日はお勤めの日ではないのでしょうか、先日比べれば日常的な外国の外套をお召しになっていきます。そのお姿が自らの白い吐息で曇りがかかってしまうのが大変に惜しく思われて、私はゆっくりと顔を上げました。

祥助様はただ優しく私を見つめていてくださいました。

「もし、枝が落ちまする」

僅かにミシミシと軋むような音を伴って、あくまで落ち着いた声で頭上から聞こえてきました。そして間髪を入れずに祥助様が私の手を引いたかと思うと、直後に今の今まで立っていた辺りにバサリ

と松の枝が落ちて参りました。

「大丈夫ですか？」

「はい……」

私は枝が落ちて来たことよりも、あまりに近くに祥助様を感じていることに戸惑うばかりです。冬の寒空の下だというのに、体は火照って汗ばむ心地がします。

私は何とかそれを紛らわそうと、枝の落ちて来た元を見上げました。するとそこには松にしがみつくようにしながら、きよとんとした面持ちの良太郎さんがいらっしやいました。

「お怪我はありやせんか？ 椿お嬢さん、旦那」

「ああ……だが気をつけて給え」

そう言つて祥助様は私の手をお離しになると、落ちた枝に手を伸ばしました。

「旦那、それに触らんでください。病気にかかつて虫のたかる枝です。今僕が取りに降りますゆえ」

良太郎さんはずりずりと枝を慎重に後退しながら言葉を続けます。色素の薄い柔らかい癖っ毛の青年が、庭の枝の上を慎重に移動するさまは猫そのもののように思われました。

私は良太郎さんが病気の松の枝を見つけて攀じ登り、懸命に手をのばして枝を切ったのかと思うととても微笑ましく感じられて、先程まで火の付きそうだったことも忘れてクスリと小さく笑ってしまいました。

「どうも、すみません。お嬢さん」

程なくして門から良太郎さんがやってきて、ざんぎりの頭を搔きながら枝を取りに参りました。古い端切れに枝を巻いて、罰の悪そうに苦笑しています。その頬が少し赤みを帯びて見受けられるのは、ただ単に空気が冷えているからだけではないのでしょうか。若干照れた表情が心を和ませます。

「ご苦労様、良太郎さん。まだ頭領も作業なさっておいでなのかしら？ もう日暮れですから、また後日になさってはい？」

すると良太郎さんはキヨロキヨロと夕暮れ迫る空を見回します。

「…そうですね。親方にも言ってみますんで」

「ええ、遅くまでありがとうございます」

良太郎さんは嬉しそうに微笑むと、再び門から庭へ戻っていきま
した。

「今のはどなたです？」

その姿が庭の中に消えるのを待つて、祥助様は私にお尋ねになり
ました。まったく性質の異なる良太郎さんをどうご覧になったのか
分かりませんが、祥助様はどこか呆気にとられたような雰囲気でご
ざいました。

「専属の庭師がお連れになったお弟子さんですの。お会いするのは
今日が初めてでしたが…」

「なかなか愛嬌のある男ですね」

「ええ、とても」

私はそう言い切つて祥助様に向き直りました。そしてそのお顔を
しかと拝見した瞬間に、あの火の付きそうな心持ちを思い返して、
見る間に赤面していききました。良太郎さんが私の心を和ませてくだ
さったので、つい祥助様への心構えも解いてしまっていたのです。

ああ…なんと恥ずかしい。

まるでヨネに対するように返事を返してしまうなんて。

「私といるのは緊張なさいますか？」

祥助様は少しだけ寂しそうな面持ちで仰いました。私は「いいえ、
そんなことは…！」と否定をしたのですが、再び不躰に首を振るも
のですから、祥助様のお言葉を肯定しているのと全く変わりませ
んでした。

私は震えだしそんな唇を噛み締めましたが、それだけでこの緊張
を抑えられようはずありません。

祥助様のように立派な方を前にして、尚且ついずれそんな方の伴
侶になるのかと思うと、目の前が眩むような思いなのです。それが

ただ緊張にだけに繋がっているのではなく、その傍らにちゃんと嬉しい気持ちもあるのだということを、態度の一つだに表すことができないなんて。

私は自分が真に情けなく、じわじわと涙が滲むのを堪えることもままなりませんでした。

「…今日は忍んで参りましたから…」

ややあつて祥助様は不意に言葉を代えて、もう一度私の手をそつと取りました。

「次は正式に会いに訪ねます。大安の日和…仲人様のおっしゃる通りに。本日は驚かせてしまい、大変に申し訳ありませんでした」

そう言つて私に視線を合わせて微笑みかけて、祥助様は颯爽と藤宮の門前を後になさいました。

私はそんな祥助様のお心遣いに御礼を申し上げるところか、お見送りの言葉すら口にすることができず、ただ遠ざかっていく背中を見ているしかなかったのです。

第四話「色は匂へど」

弥生の空は、どこか柔らかかなものでした。

初春も清々しいものではありませんでしたが、私にはこの花咲く頃の暖かな春の方が好ましく感じられます。いずれ蒸し暑い夏にはなるものを、今はこんなにも穏やかで、無常を願うのも無理のないことのように思われました。

先の如月末の大安、私と祥助様はそこで初めてお会いした、ということになりました。

互いに予めお会いしていたことは、私と祥助様以外には伊集院家の小男だけでしたので、暗黙の了解のうちに危うきには近寄らざるべきと判断したためでした。

祥助様はあの帰り道でお目にかかった時と同じように、規律正しい外国の着物をお召しになっていらつしやいました。それは松江叔母様がお持ちになった写真から出て来たようにも思えるほどで、私は粗相を致すまいと泳ぐ目線を祥助様の首元に宛てたきりでした。

祥助様は時折合う目線に、丁寧に微笑み返してくださいませ。その度に何故こんなにも顔が熱く感じられるのか、私は自らの心持ちをひどく恨めしく思えてなりません。

当日は正式な結婚の約束までには至らなかつたのですが、私にも祥助様にもこのご縁を断る理由はなかつたので、そのままお話を進めるといふことになりました。その時の松江叔母様の嬉しそうなこと、兄・蓮太郎の言っていたことが真であつたのだと思い知るところとなつたのです。

しかしそれからの私の心は喜々としている一方で、大変な不安をも感じておりました。

未だ祥助様にお会いするたびに鼓動は激しくなるばかりで、こんな様子ではいつ大きな粗相を犯すかも分かりません。

その上、見合いの席での祥助様の御母堂様が、どこかこのご縁に

乗り気ではないようにも思われて、私はあの席で既に何かお気に召さないことをしてしまったのではないかと、心の重くなる思いだったのです。

私は小さくため息を付きました。

この心の重さを計れるならば、さしずめ米一俵といったところでしょうか。私は傍らの梅の木さえ、見上げることができませんでした。

「椿お嬢様」

不意にヨネが私を呼び止めます。私は僅かに一呼吸おいて「はい」と振り返りました。

「門前に伊集院祥助様がお見えです」

「祥助様が…？」

途端に私の胸がドキリと大きく鳴りました。

「如何致しましょう？ 旦那様はお仕事でまだお戻りになりませんし、総子様もちょうどお出掛けになっています」

お二人だけで密会なさるのには賛成いたしかねます、と暗にヨネは申します。けれど…

「ヨネ、貴女がいてくれれば差し支えないでしょう。どうぞお通しして」

「畏まりました」

一体いかがなさったのでしょうか？ 祥助様が突然にお越しになるなんて。

頭の中を悪い考えばかりが錯綜していきます。そのように抱えている不安ゆえか、お会いする前から私の呼吸は浅くなるばかりでした。

「こんにちは、椿さん」

程なくして庭に祥助様がいらつしやいました。私は恐る恐る振り向いて、会釈に合わせて目線を外すようにご挨拶申し上げました。

祥助はまたゆつたりとした普段着でいらして、それでもきちんと詰めた襟元がとても凛々しく映ります。勿論そのお顔も同じようであつたのでしようが、私にはその襟元を見るだけで精いっぱいだったのです。

「唐突にお訪ねしてしまつて、重ね重ね申し訳ありません」

「い…いいえ、とんでもないことでございます…！」

私はまた恥知らずにも頭を大きく振りそうになりましたが、祥助様の後方、少し離れた所にいるヨネが目に入り、それをぐつと堪えました。鼓動は聞こえるほど大きく鳴り響いていましたが、仮にも我が家の庭で不躰な対応はできません。私は両の手を胸元で固く握り合わせました。

「今日は…いかがなさいましたの？」

私は一呼吸ついたあとに、小首を傾げて尋ねます。

「いえ…用事というほどでもなかったのですが、少し気掛かりです」

「…とおつしやいますと？」

「私の母のことで、貴女が気の毒になさっているのではないかと」

祥助様は少し気落ちしたような表情で、一度目線を伏せました。

御母堂様：間違ひなく見合いの席でのことでしょうか。今でも脳裏にありありと浮かんできてしまうのです。その微笑みはどこか作り物のようで、松江叔母様の振るお話にも一歩退いたようなご返答、時折私を見遣る目には心が凍る思いが致しました。

私を見定めるような仕草に、御母堂様が祥助様を大切になさっているのはよく分かったのですが、そのために私を受け入れては下さらないように思えて、このご縁に僅かな影を見たのでした。

「いいえ、祥助様がお気になさるほどではありません」

それでも私はどうしても強がつて？大丈夫です？とは言いかれず、少しだけこの重い心内を含ませました。

祥助様ならば、それをも分かってくださるとも思つたのです。

本当は気に病んでおります…本当は不安を抱えております。

それすらも言い出せぬような仲にはなりたくなかつたのです。すると祥助様は「そうですね」と、弱々しい笑みをお浮かべになりました。そしてそれつきり御母様のことでは、互い口火を切りませんでした。

私は祥助様がお気遣いくださつていたことが大変に嬉しく感じられましたし、御母様様のことをこれ以上この場で申し上げることがはしたないと思つたのです。ただこの時ばかりは私の方が、より明るい笑みを祥助様に向けていたのでした。

「…梅はもう散つてしまつたのですね」

不意に祥助様は表情を戻して、私の背後の梅を見上げました。

弥生に入つて梅の木は、紅白ともに散つてしまいました。春になることの心残りといえ、この梅に他なりません。暑い夏を堪えて冬の雪を忍び、そして再びの一番に咲き誇る…それまでの辛抱とはいえ、常世の花を願つてやみません。

祥助様の目も、それを思わせるように梅の木を見つめていらつしやいます。

「普段は花を愛でたりなどはしないのですが、今年からはまた次の梅が咲くのが楽しみになりましたね」

「まあ…何故ですか？」

趣旨の異なる祥助様のお言葉の真意を、心中で探しながらそう尋ねますと、祥助様は数歩歩みいでて私の真横に並んでは、梅の木の幹にそつと触れました。

「貴女とお会した時にはいつも、どこからか梅の香りがしていましたから、私にとって貴女を象徴するものに思えるのです。？椿？さんに梅の香というのも、おかしいのかもしれませんが」

けれどそんな梅の香りを好きになつたのだと言いたげに、祥助様は私を真つ直ぐに見つめるのでした。

私はまた顔が熱くなるのが分かって、何も言えないままにただ祥助様を見つめ返しました。その切れ長の美しい瞳から、どうしても目を逸らすことができません。

いえ、逸らしたくなかったのです。

やっと合わせることでできたこの瞳を、このまま釘付けにしたいとすら思えたのでした。

するとややあつて頭上の梅の枝から、散り残っていた紅の花びらがヒラリと私の肩に舞い降りてきました。私は目の端でそれを捉えます。

「…色は匂えど、散りぬるを、我が世誰そ、常ならむ。だからこそ

…」

祥助様もその花びらに気が付いてそう呟くと、そつと手をお伸ばしになって、私の肩からひとひらの花びらを取りました。そして胸元で固く握られた私の手を緩めて解くと、その上に花びらを乗せて、私にそれを握らせるように両手で包みこみます。

「せめて末永く続くよう、守っていききたいと思います」

そうして私に微笑みかけた強い目線に、祥助様の揺るぎない意志を感じました。

すると不思議なことにそれを見受けた途端に、あの火のような心持が一瞬にして鎮まっていったのです。私は小さく息を吐きました。まるで息詰まっていた呼吸が動き出したかのように。そして祥助様を真つ直ぐ見つめたまま「はい」と頷きました。

？口約束は浮世の花？だとヨネはよく申したものでした。

形があるようでないもの、よしんばあつたとしてもすぐに散ってしまう儂いものだと。

けれど祥助様のお言葉には何をも信頼させて下さるお力があるように思われました。ただ私だけを見つめる暖かな手の温もりに、先程まで心にかかっていたご縁の影が晴れたように感じたのでございました。

それからさらに数日後、私が女学校から帰りますと、庭には冬の
間中幹に巻かれていた筵むしろがあちらこちらに剥いてありました。藤宮
の庭に関することは、全て七枝屋の統べるところでしたから、私は
良太郎さんが再びお出でになっているのだとすぐに分かって、玄関
へは向かわずに筵を辿るようにして庭を歩いて参りました。

何故そんなにも良太郎さんにお会いしようと思っただのか、この時
は考えもしませんでしたし、そうすることがごく自然なことである
ようにも思われました。

きつとそれは良太郎さんが、誰の心をも和ませてくださるからな
のでしょう。女学校で気の置けない学友と仲良く話してはおりまし
たが、祥助様とのことがあってか、それもこの頃は張り詰めるよう
な思いで、そんな私の心を解き放ってくださいるのは良太郎さん唯一
人なのだときつと分かっていたのです。

足は自然と良太郎さんの元へと急ぎます。

「こんにちは、良太郎さん」

私は松の冬支度を解いている良太郎さんを見つけて、逸る心でご
挨拶申し上げます。良太郎は走り寄る私にいつものように屈託な
く微笑んで、「こんにちは、椿お嬢さん」と返して下さいます。

「今日はお一人でいらしましたの？」

近くに七枝屋の老統領の姿がないことに、辺りを見渡しながら尋
ねます。

「へえ、親方は苗木を仕入に行きましたんで。春にはこの庭に新し
い花が増えますよ」

「まあ、嬉しいわ」

私が笑うと良太郎さんもまたにっこりと微笑みました。相変わら
ず無造作なざんぎり頭が風に揺れて、柔らかな陽射しに笑みが映え

ます。

「無邪気？という言葉が幼子にしか当て嵌まらないという概念は、もはや虚言のように思われてなりません。誰がこの微笑みに邪気なものを感ずることがありましようか。その柔和なお心と微笑みに、私の胸はまたとくんと打つのでした。」

「…じき桜の季節ですね」

良太郎さんは近くの桜の木の枝先が、僅かに膨らんだ蕾で薄く紅色がかっているのを見て呟きました。

「この庭は本当に親方の言っていた通りでした」

「あら、なんとおっしゃいましたの？」

私がそう尋ねますと、良太郎さんはますます嬉しそうに微笑むのです。

「藤宮家の庭の花は、そりゃあ見事に咲くのだと。春になったらどこの庭園よりも見物だと言つのです。だけでも僕は、他のどの花にも先んじて寒空の下に咲いた梅の花を見た時点で、庭の全てを知つた思いでした。…もう散っちゃいましたけどね」

そうしてまた？ふふふ？と笑う良太郎さん。私もそれにつられるように、思わず顔を綻ばせました。

何とも心地よい時間…花を見上げた時と同じように、心の蟠りが姿を消していきます。

けれど同時に先日のお言葉が頭をよぎりました。

「梅の花は散ってしまったけれど、来年咲くのが楽しみになった。花が散るものならば末永くあるよう守りたい」…私にはそのお言葉が、祥助様の結婚へのご意志であるように感じられました。ですから私は祥助様に「はい」と頷いて、全てを委ねたいと思ったのです。心も、この生涯さえも。

では良太郎さんは？

日頃から草花に接している良太郎さんも、同じようにおっしゃるのでしょうか？

私は意地悪にも良太郎さんのお心をも知りたくなって、尋ねてみることにしたのです。

「色は匂えど、散りぬるを…。この世に常世の花があったなら、さぞかし美しいのでしょうか。良太郎さんもこの梅がそうであつたらと思ひまして？」

良太郎さんは私の言葉にまた一枚箆を剥ぎ取ってそれを地に置くと、「うーん…」と少し考え込むように梅の木を仰ぎ見ました。

「？美しく咲けども花のむじょうにも散るらむ？…僕の父がそう言つてました。尤もそれは、早世した母のことを言つたんですけどね」

「…それでは…お父様は大変に悲しまれたのでしょうかね」

予期せぬ良太郎さんの返答に若干戸惑いつつも、私には良太郎さんのお父様がそう呟いたお姿が見えたような気が致しました。

決して涙は見せず、しかしその丸めた背中に哀愁を漂わせ、一人位牌の前で酒を酌み交わしている…そんな様子が、まるで実際に見ていたかのように浮かびました。

そう…それは私の父も同じだったのです。

実母の亡くなつた時の記憶と言えば、そんな父の姿が強く残っているのです。私は当時のことを思い起こす度に、ひどく心が締め付けられたのです。いつそ父が私やヨネと同様に、涙を流していたのならどんなにか良かったか。幼いころの朧気な記憶の中の父の背中が、長く私の中で悲しさを表す象徴でした。

けれど良太郎さんは私のその想像とは裏腹に、尚も微笑んで言葉を続けるのです。

「そう思うでしょうか？でも父はそう詠んだ後、？だからこそ大変に美しかった？と言つたんです。母も懸命に生きていましたから、その分だけ死さえも美しく思わせたんでしょうね。この梅も他の花も同じですよ。人の一存で縛り付けちゃ可哀相です。花は何かに優ろうとするでもなく、人に見られるためでもなく、ただ花の気の向くままに懸命に、綺麗に咲いては散るんです」

「花の…気の赴くままに…？」

私は良太郎さんのお言葉にそれ以上何も返すことができず、ただ唖然と見つめるばかりでした。しかし良太郎さんはいえ、そんな私ではなく梅の木に視線を合わせたまま微笑んでいらっしやるのです。

春風がその茶色味がかつた奔放な髪を揺らします。

「色は匂えど、散りぬるを、我が世誰そ、常ならむ。それを哀れむ人もいますけど…」

良太郎さんはそう呟きながら、ゆつくりと視線を私に合わせて言葉を続けました。

「常ならんからこそ、自由なんじゃないですか？僕はそんな花が大好きなんです」

そうしてまたにつこりと微笑む良太郎さん。私はその笑みに大きく胸が高鳴ったのを感じました。それこそ祥助様とお会いしている時と同じほどに。

けれど不思議なのは、その心が高鳴っているにも拘わらず、火のようにいきり立つことがなかったことでした。私の心はまるで静かな泉のようで、湧き水のごとく嬉しい気持ちがかんこんと湧き上がってくるのです。

「また綺麗に咲きますよ」

良太郎さんはまるで我が子を見つめるように、もう一度梅の木を見上げました。そのお言葉はきつと、私が散り切った梅の花を嘆いていると思つてのことなのでしょう。

けれど私はそんな良太郎さんの優しさに気がついて、御礼の言葉だに申し上げることができませんでした。

皆誰しも花が変わらずあるように願うものだ、そう思っておりました。

祥助様もそれを願いながら、？せめて守りたい？とおっしやった

ことが大変に新鮮に感じられて、私の心に焼き付いていたのです。或はその言葉の裏の真意に、一人舞い上がっていたのかもしれない。

けれど良太郎さんは散ることも花の自由だと、だからこそ美しいものがあるのだとおっしゃったのです。

相反するお二人の見解のどちらが正しいのか、私にはまったく分かりませんでした。いえ、一方に正しさを見ようとしたことが、そもそも間違いでもあったのでしょうか。

花の散るのを守りたいと言った祥助様と、それすらも許容する良太郎さん。

対する私と言えば、花の散ることを心のどこかで恐れておりました。そしていずれ散るものならば、花開く直前の頃が一番胸躍るものと。咲いた花を愛でる一方で、いつまでも花が咲かないままの方が、ずっとそんな心持でいられるのにと思っていたのです。或は花の一生に、自分を重ねていたのかもしれない。蕾の頃は咲くことを夢見ていられるのに、咲いてしまえば終わりだなんて考えて、現状から一步踏み出すことを恐れていたのです。何も変わらない毎日を嘆いている一方で。

けれど…

「来年の花の咲くのが楽しみになりましたわ」

良太郎さんのお考えにふっと心が楽になるのを感じて、私は心の底から思ったことを思わず口にいたしました。来年の梅の花を見るときはきつと今年とは違っている…そう思うと、開花を心待ちにしないわけがなかったのです。

良太郎は私の言葉に、それはそれは満足そうに笑みを浮かべて、ただ力強く頷いて下さったのでした。

第五話「花の散る様」

日毎膨らむ桜の蕾に急かされるように、季節は段々と春めいて参りました。

弥生の初め、私は一人庭に出て桜の木の下にありました。桜はその散り様も大変に見事なものですから、私の心は早くも待ち遠しく躍っております。

やはり花は愛されてこそ、その輝きを増すのでしよう。

藤宮の庭の桜がどれほど誇れるものなのかは考えたこともありませんでしたが、祥助様が…良太郎さんが、それをご覧になったなら何とおっしゃるのか、思うたびに顔が緩むのでした。

「椿お嬢様」

ヨネはいつものように控え目に、しかし私がしかとこちらを振り向くように名を呼びます。そして桜の木から目をヨネへと向けますと、そつと私に右手を差し出すのでした。

「先日七枝屋のお若い方から預かりました。庭に落ちていたそうでございます」

「良太郎さんから？」

私のがぞきこんだ先のその手には、日の光に輝く小さな貴金属が乗っています。見れば円形の細かな装飾が施された黄金の飾りで、外国の御召し物に似合いのものでした。藤宮家にはまだ外国の着物を好んで着る習慣がありませんでしたから、家の中の誰かのものか考えると、心当たりは浮かんできませんでした。

けれど私は何故かそれをよく見ていた気がしてならなかったので

す。では小さな頃から知らず知らずの内に見ていたものかと問われるとそうではなく、つい最近、それも心疼くものを伴う思い出しでは浮かんでくるのです。鼓動が早くなるような…呼吸が苦しくなるような、そんな甘く疼く心の痛み。

そして私ははっとしたのです。

「…祥助様だわ」

常日頃顔を上げられないばかりに、私は祥助様の胸元をいつも見遣っておりました。その焦点の先にあったもの、それこそヨネの手の内にあるものだったのです。

先日お越しになった際に落としてしまったのでしよう。この飾りがただの装身具なのか、それともお勤めに必要なものなのかは分かりませんが、とても貴重な輝きにすぐに届けるべきと察しました。

「ヨネ、私これを届けに行こうと思います。貴女も来て下さらない？」

「言わずもがなでございます」

ヨネは私に手の内の飾りを渡しますと、伊集院の家を調べに母屋へ戻って行きました。

私は手渡された飾りを握りしめて、今一度祥助様のことが分かるかと思うと人知れず微笑みました。いつも祥助様の方からいらしていたものを、この度は私から参上したなら、どのように迎えてくださるのでしょうか。また思いがけず嫁ぐ前に家を拝見できるなど、有り難いことこの上ありません。あわよくば御母堂様にお会いして、そのご機嫌をお伺いしたいものです。

けれど、そう折よくお会いできますでしょうか？

御母堂様もさることながら、祥助様にお会いできる確証もないのです。せめて私が参ったのだとお伝えしたい…、そう思い立って私は庭の椿の木の前に進みました。

弥生になって椿の花は全て枯れ落ちてしまいました。奥ゆかしい紅の花びら一枚でもお持ちできればと思ったのですが、もはやそれすらも見当たりません。そこで私は蕾のままとうとう咲かなかつた

椿の枝を、そつと静かに手折りました。この特有の丸い蕾をご覧になったなら、椿の枝と分かってくださるでしょう。

「お嬢様、準備整いました。ございます。」

ヨネはその手に私の道行を携えて戻って参りました。

「ありがとうございます。それで、祥助様の御家は分かっていますか？」

「はい、さほど遠いものではございませんでしたが、車をご用意いたしましょうか？」

「そうですね…けれどこんなにいいお天気なのですもの。折角ですから、ゆっくり歩きたいと思えますわ。」

「では道々お供いたします。」

ヨネは頭を垂れて、私に道行を恭しく差し出しました。私はそれを身に纏いますと、ヨネを連れて裏口から外へ出たのでした。

伊集院家は藤宮家のある町と、その隣町の狭間にありました。幾分距離はありましたが歩けるものではありませんし、この暖かな気候に足取りも軽く感じられました。

小鳥は囀り、桜を始めとする草花はどんどん蕾を膨らませています。人ならずとも皆、春が待ち遠しくて仕方がないのです。

伊集院家に向かう道程は、私にとって初めて歩くものでしたから、私はいいどりをしながら歩いておりました。小春に見知らぬ道を行くのは、なんと心躍ることでしょう。それが外ならぬ祥助様へと続くものなのですから、私は一人顔を綻ばせるばかりでした。今日こそはきつと落ち着いて祥助様にお会いできる…、そんな予感がまた嬉しさに拍車をかけるのでした。

「お嬢様、こちらの御家でございます。」

半刻ほど歩いたところで、ヨネは長く続いた垣根の切れ目を指し示しました。そこは我が家と同じほどに広いものでしたが、雰囲気はまるで違うものに感じられました。

質実剛健な垣根、そして庭。母屋はどっしりと構えて、動かざる様子は山のようにも思えます。門扉は過敏なほどに頑丈に造られていて、我が家が庭園なら伊集院家は皆のようにも見えませんでした。

先程までの私の躍る心は、途端に足を止めてしまえます。その厳格なる様は、誰をも引き入れぬ強いものを感じさせるのです。

「怖じることはありません、お嬢様。どれ、このヨネが扉を開いて見せましょう」

ヨネは私の心持ちを読み取って、数歩前に歩み出しました。そして重ねた年の功で堅く閉ざされた門の向こうへ、「お頼み申し上げます」と声をかけました。

「…へい、どちら様でございましょう？」

するとややあつておもむろに通用口が開いて、見覚えのある小男が顔を出しました。初めて祥助様にお会いした時に、呼びにいらしたあの方です。相変わらず腰が低く前屈み気味な立ち居振る舞いに、禿頭がより印象に残ります。

「おや、藤宮のお嬢様で？」

小男は私を見ると即座に言い当てました。私がヨネに何でも話したくなるように、祥助様もこの方に色々お話しになるのでしょう。私はその一言に小さく安堵の溜め息をつきました。

私の名をお呼びになったその一言だけで、この厳格な雰囲気の中に受け入れていただけたのだと、どこか安心したのです。

「先日拙宅で祥助様の落とし物を拾いましたので、お届けに上がりました」

そういつて右手を開いて黄金の飾りを示しました。

「おお…これは確かに坊ちやまのもの。どこぞで落としたかと探しておいででした。まして貴女がお拾いになっていたと分かったら、さぞお喜びになりましょう。さ、お入りくだされ。私が話をつけま

しょうぞ。お嬢様が直接坊ちやまにお渡しになつてくだせえ」

小男は嬉しそうに手招きをして、私とヨネを庭へと入れてくれました。私の胸は未だ動悸を感じていましたが、どこか高揚した気分でした。

今いる場所が祥助様の生まれ育つたところなのだと思うと、私もそんな中に入れたような気がして、早くも私が種となって新たな庭に来ることが出来たのだと、先走った気持ちになっていたのです。

「この辺りでお待ちくださいませ。母屋にいらっしゃるはずですから、お声掛けして参ります」

小男はそう言い残しますと、私とヨネを庭にひとまず残して、腰の低いまま屋内へ入っていきました。

春風がどこか遠くの花の香りと、伊集院家の庭の緑の香りを混ぜ合わせて運んできます。常日頃藤宮の花々の咲く庭を見慣れていましたから、このように雄々しい庭がとて新鮮に思われました。たとえ胸が躍つていてもその場で背筋を伸ばしていないといけないよ、うな、そんな緊張を心に落とす…庭はまるで直立不動のまま私達を取り囲むようです。

私の心臓はとくとくと程よい強さを持って高鳴っております。そして拾い物を渡した時の祥助様を思い浮かべると、早くお会いしたい気持ちで満たされていったのでした。

「どうぞお考え直しあそばして、祥助さん」

不意に母屋の幾分距離を置いた離れから、女性の声が聞こえて参りました。感情的になっていましたが、どうやら祥助様の御母堂様のようです。

私とヨネは互いに目を見合わせて、いけないと思いつつも耳をそばだてました。

「何故なのです、母上」

次いで祥助様のお声が聞こえてまいります。小男は祥助様が母屋にいると申していました、実のところはこの離れにいらっしゃる

ようです。

「母にはこのご縁が良いものにはとても思えません。まだ結納も済ましてません故、お断り申し上げることができませんはすです」

「お言葉ですが母上、私にはご縁をお断りする理由がないように思われます。母上もあれほど待ち望んでいらした話ではありませんか。それを何故今更…」

「ああ…この母の心を分かって頂戴、祥助さん」

御母堂様のお声は途端に悲痛なものになりました。もはやお二人のお話が、間違つことなく私のことであるのは明白です。それも不穏なものであることは火を見るより明らかで、私はその場から一歩も歩くことができませんでした。

「あの娘御、名を？椿？と申すではありませんか。なんと不吉な…。伊集院家には昔から、椿の花だけは庭に植えないしきたりなのです。それなのに貴方があの娘御と一緒になつて、その身に何か起きるのではないかと思うと、母は居ても立ってもいられないのです。もしものことがあるうものなら、私はあの娘御を怨むほかないのですもの…！」

「そんな…それはただの言葉の綾に過ぎません！いかなる御名前であらうと、あの方が立派な藤宮の娘であることに代わりはないではありませんか？！」

「私だつて…私だつて！あの娘御がもし違つ名であつたなら、結婚を心から喜べたのです！それが何故あんな…」

御母堂様はそれつきり、声をあげて泣き出してしまいました。齒を食いしばるような呻きと、悲鳴にも似た嗚咽を伴う鳴き声が、離れから嫌でも聞こえてまいります。

何も知らぬ者がそのお声だけを聞いたならば、幼子を亡くした母が悲しみに発狂したのではないかとすら思うでしょう。そしてそのように泣く母がどんなに憐れかと。

けれど今この憐みの根源は他ならぬ私なのです。

ああ、なんと根拠なき罪悪感の募ること。

しかしその時の私はというと呆然と何も考えることができず、ヨネが氣遣つて「お嬢様…」と呼び掛けたことにさえ氣付きませんでした。一瞬のうちに私の脳裏を駆け巡つたのは、先日の見合いの時のことでした。あの席で御母堂様が一人乗り氣でなかつたのは、私が粗相を犯したからではなかつたのです。いえ、いつそのことそうであつたなら、どんなにか良かったことでしょう。？椿？という実母から頂いた名前の時点で、御母堂様とは縁遠いものだったので。よしんば祥助様とご一緒になれたところで、ゆくゆくは御姑様になる御母堂様は辛い思いをするばかり。お嘆きになるのを知っていて、どうして一緒になることができましょう。

ここに来るまであれほど高揚していた私の心は、今はすっかり凍り付いてしまいました。そして御母堂様のお言葉が頭の中で繰り返されるたび、私の心に刃が深く突き刺さるのでした。

「坊ちやま…！」

御母堂様のお声を聞きつけて離れに飛び込んでいった小男の声に、私ははっとしました。それと同時にこの場にはいけないと思ひ立て、離れの縁側に黄金の飾りを置きました。

携えてきた椿の蕾は、添えることができませんでした。

御母堂様のお言葉に、この伊集院家の庭に持ち込んでならぬものと思つたのです。そして私は小走りに、逃げるように伊集院家を後にしました。次に祥助様にお会いする時には、まるで何も聞かなくなつたかのように振る舞わなければと、冷たくなつた心でそう思いながら、ひたすら走りまわりました。

その背後で小男に私の来訪を聞いた祥助様が、慌てて離れから飛び出していらしたことは、とうとう知らないままだったのです。

椿は花びらを一枚一枚落とすことなく、花ごと根本からぽとりと枯れ落ちます。その様が首斬りに見えることから、武家の間では大變に忌避されてきました。

伊集院家は元々生粹の武家の血筋でしたし、御母堂様の旧家も同じように武家であったに違いありません。お小さい頃から椿が不吉であると言われてお育ちになったのでしよう。弁解の余地もないほどに椿の花を嫌う御母堂様のご様子に、私は俯いてトボトボと来た道を帰っております。

ほんの半刻前には空を見上げて桜の咲きそうな様子を愛で、囁きかける小鳥の囀りを楽しんでおりましたのに、今日に映るのはぼやけた自分の足元で、耳に聞こえるのは繰り返される御母堂様のお声だけでした。ヨネは何も言わず、そんな私の後を静かについてまいります。

？結婚は女の幸せであれ？…そう口癖のように申してきたヨネにとっても、何も言葉にならないのでしよう。私は胸元に持った椿の蕾を見遣りました。

季節を終えて尚、花を咲かせなかつた遅咲きの椿。

花を咲かせる幸せも知らないままに、また長い眠りについてしまった夢見の蕾は、その深緑の殻の中で何を思っているのでしょうか。

私にはその小さな蕾が、今後の自分を示唆しているように思えてなりませんでした。

「…私…桜が羨ましいです」

私はふと咲きかけの桜を見上げて、誰にともなく呟きました。

桜は一斉に薄紅色の花をたわわに咲かせ、そして潔く散っていく様が見事だと、誰もが口を揃えて称賛するのです。武家にとっても商家にとっても、美しく縁起の良い花。もし私が？桜？という名前だったなら、御母堂様は私を受け入れて下さったのでしょうか。

けれど所詮は椿、暖かな春にまみえぬ冬の花。

寒空の下でいくら懸命に咲いたところで、首をぼとりと落として、桜にはどうあがいても敵わない…想いが届くこともないのでしよう。

私の目にはじわりと涙が滲んでまいりました。

「あれ？椿お嬢さん？」

不意に私を呼ぶ声が耳に入り込んで来て、私は顔を上げました。するとそこにはいつもの七枝屋の羽織りを脱いで、ゆったりとした袴姿の良太郎さんがいらっしやいました。片手に小ぶりの風呂敷を下げて、どこからかのお帰りのようでした。そのお顔にきよとんとした表情を浮かべて立っておいでだったのです。

「…どうかしたんですかい？」

良太郎さんにそう尋ねられて、私は咄嗟に顔を背けてしまいました。涙を堪えて顔のあちこちが真っ赤になっているのが分かったのです。私は初めて良太郎さんと話すときに目を合わせる事が出来ず、ただその足元を見るばかりです。

すると良太郎さんも何か察するところがあつたのでしょう。足元だけでも一呼吸置いて思考を巡らせているのが分かります。

「…遅咲きの椿ですか？」

ややあつて良太郎さんは趣旨の異なる質問をなさいました。

「い、いいえ…これはもう…」

？咲かないのかもしれないかと、私は自らの見解をどうしても繋げることが出来ませんでした。その一言がすべてを決定づけてしまふように思えて仕方がなかつたのです。

しかしそれがますます自分を惨めに思わせて、とうとう私の目から涙が零れました。人前で、しかも外出先で涙するなど以つての外立ち居振る舞いは美しく、健気で気が利き、如何なることにも取り乱さない…それが由緒ある藤宮の娘であるといわれてきました。

けれどそうは言っても涙はとどまることを知りません。堪えようとすればするほどに情けなく、見る間に零れた涙が手を濡らしていききました。

どうして…どうして…、と心が自問自答を繰り返します。

何故椿という名前だったのでしょうか。

何故祥助様が武家のお家柄だったのでしょうか。

何故見合いのお話が舞い込んだのでしょうか。

枯れることを知っているなら咲かずにいればいいものを、何故短い命で花は咲き誇ろうとするのでしょうか。

蕾のままなら夢を見ながら、傷つくこともなかったのに…。

私は声を押し殺して泣きました。いつもなら私を窘めるヨネも、ただ口を閉ざすばかりです。私にはもう何もかもダメになってしまったように思えてなりませんでした。花には何の罪もないのに、椿すら憎く思えてしまうのです。

「…遅咲きの花は綺麗に咲くといいます」

良太郎さんはそんな私を前にして尚、柔和な落ち着いた声で「何故だか分かりますか」と続けました。無論私は返答できず、ただ控え目に良太郎さんを見遣ります。

「それは蕾の中に秘めたものが沢山あるからなんです。だから咲いた時、他のどの花よりも綺麗なんです」

そして一呼吸置いて、またニツコリと微笑んで「その椿も咲きますよ」とおっしゃいました。

「けれど…椿の季節は終わってしまいました…」

冬は明けて今は春、意固地になっていた私はつい良太郎さんの言葉を自嘲的に否定してしまいました。彼が心から慰めて下さっているのを知っていて、それでも受け入れられなかったのです。

もう良いのです…もう咲かないままでも。

咲いた後の散る様を、あれほど忌み嫌われるものならば、この丸い蕾のまま庭に憤んでいるべきだったのです。

身の程を知らされた気分でした。もとより私のような甘い考えで、伊集院家に嫁いではならないものに違いなかったのでしょうか。

そう思うと、自嘲の笑みさえ私の口元から消えました。涙はまたポロポロと静かにこぼれます。

「でも、椿は木編に春と書くでしょう？」

良太郎さんは私の涙を前にしてなお、とても落ち着いた柔和な声で仰いました。そんなお声でなければ、今の私の心には聞こえては

こなかったかもしれません。

私は涙眼を少し開けて、良太郎さんのお声に耳を傾けました。

「だから本当は椿は春の花なんです。いや…椿が咲く頃が本当の春なのかな？そう思うといつ椿が咲いたっておかしくはないと思うんです」

そこまで一息に言い切ると、良太郎さんは私に歩み寄りました。

「その枝、僕にくれませんか？」

「…え…？」

良太郎さんの唐突な申し出に、私は涙で顔が汚れているのも忘れて顔をあげ、つい呆気にとられてしまいました。良太郎さんはいつもと変わらず茶色い髪を自由に風になびかせて、私に微笑みかけています。そしてそれ以上ねだるでもなく強要するでもなく、ただ私の言葉を待っているのです。

私はその真つすぐな瞳に、言われるがままそつと椿の枝を差し出しました。良太郎さんを信じているはずなのに、小刻みに震える指先は、椿の開花を諦めていることを示唆しているものでした。

「大丈夫ですよ」

椿の枝を受け取って、それを優しく撫でるようにすると、良太郎さんは柔らかな声で囁きました。

「藤宮の椿の花が綺麗に咲かないわけがないんです。この椿もきつと咲きます」

そしてまた優しく微笑みかける良太郎さん。

私はそのお言葉に何もかもが救われた思いが致しました。私の背中を後押ししてくださいだった暖かさに、凍てつくようだった心は溶かされて、私はまるで子供のようには溢れる涙を拭うばかりだったのです。

第六章「箱庭に花」

私は本当に祥助様との結婚を心待ちにしていたのです。

そうすることが父や松江叔母様のお顔を立てることでもありましたし、何より私に誠実であるうとする祥助様のお心が大変に嬉しかったのです。お会いするたびに顔を真っ赤にして俯いて、口ごもつてしまう私を、少しも疎むことなく支えてくださる、そんな私でも良いのだと…そう仰った祥助様の優しさが身に染みたのです。

本来なら先日の伊集院家でのやり取りも、喜ぶべきはずのものだったでしょう。御母堂様のお言葉に真正面から対峙してくださいましたので、私が一切合財に絶望する必要はないと分かっていたのです。それでも刃は未だ抜けぬまま、私は祥助様にお会いすることに怯えておりました。

祥助様は大変にお優しい方ですから、私がああ庭で全てを聞いたのだとお知りになったら、きっとご自分を責めてしまうと思ったのです。私はそんな祥助様のお顔を拝見するのが、とても怖くて仕方がありませんでした。いつかお越しになることを想像するだけで、胸が張り裂けるような思いだったのです。そしてそう思ったまま、私はまた庭で佇むほかなかったのです。

そう…今までと同じ、何も変わらない。

あの時見合いの相手が自分だと言い出せなかった私と、何一つ違つてはいないのです。

氣遣う心は、実際に氣遣うことができこそ意味のあるもの。いくら臆病な私が携えたところで宝の持ち腐れに過ぎないと、そう思わざるを得ませんでした。

けれど…

椿は綺麗に咲きますよ

そうおっしゃった良太郎さんのお言葉が、今の私を支えてくださっていました。そして思い出すたびに疼くこの心にも、十分に気がついておりました。

それは祥助様を想う時と同じ痛みでありながら、ずっと落ち着き払っていて心地よいもの。暖かくて柔和な陽の光。

あの帰り道でのことを思うと気まずいものもあるというのに、私はむしろ良太郎さんにはお会いしたい気持ちでいっぱいでした。良太郎さんも大変にお優しい方、あの帰り道でのことでお気になさることもございましょう。ですから？私の気持ちは何とか落ち着きましたから大丈夫です？と、一言御礼を申し上げたかったです。

そうしたならば、ああ…良太郎さんはどんな微笑みをお浮かべになることでしょうか。私は何度も想像してみたのです。

月日がまた少し経って、世間は桜がちらほらと咲き始めた弥生の終わりとなりました。

私はあの帰り道で「桜が羨ましい」と呟いたことを思い返して、桜を見上げておりました。小さな花が大樹にたくさん咲き誇っています。

それぞれが皆、違う思いで咲いてくる花だというのなら、美しくあるうと思つて咲く花と、あるがままに自由に咲く花とでは、一体どちらが栄えるのでしょうか。…どちらが幸せなのでしょう。

そんな答えは出ないまま、私は一人悶々としていたのです。

「…その答えは？どちらも？じゃないですかね」

七枝屋の弟子として再び藤宮を訪れていた良太郎さんは、私の問いにあまりにも簡単にそうお答えになりました。

「？どちらも？ですか？私はてつきり、良太郎さんは後者をお選びになるのだと思いました」

「ははは、そうですね。どちらかといえば、そんな花の方が好きですけど」

良太郎さんは剪定の手を緩めながら、まるで子供のように朗らかに笑いました。

段々と暖かくなる日和、腕まくりをして作業する良太郎さんの背中を、私はただ見つめておりました。

単身瘦躯の小柄な体も、木々を見つめるその時には大きなもの感じます。良太郎さんにとって庭の草花は、わが子のようにあつて、恋人のようであつて、両親のようであつて……。だからこそ、私は植木職人としての良太郎さんの眼差しを大変好んだものだったのです。

良太郎さんはあえてあの時のことを、一言だに口にはしませんでした。折よく数日会わなかったことで、落ち着いて互いを見ることのできたからなのでしょう。

「あの時の椿はどうになりましたか」、そんな問い掛けでさりげなく話をするつもりでしたのですが、私はそんな良太郎さんのお気遣いに甘えて、何もなかったかのように振る舞いました。本当は少し痛みを思い出しても、御礼を申し上げなければならぬと感じていながら。

「何故どちらも綺麗とお思いなんですか？」

私はゆっくりとした口調で尋ね返しました。

瞳は未だ背中「七」の文字を見つめたまま、次に切る枝を見極めている良太郎さんの邪魔にならないようにと。良太郎さんはまた小さく唸って、パチンと枝を一本切り落とします。

「そうですね…。美しくありたいと思うのも、あるがままに思うのも、花の自由だからですかね。自由に伸び伸びとした植生の花ほど、美しいものはありやせん。勿論それには少しの犠牲も必要ですけど」

そしてまた一本、枝が木から落ちました。

少しの犠牲：私が払わなければならない犠牲とはどのようなものなのでしょう。せめて誰の心も傷つけないものであれば良いのですが。

「親方がこの庭を？見事？と言ったのがよく分かります。梅に桜に

杜若、それに椿に金木犀：様々な花が互いの邪魔をすることなく、健やかに花を咲かせています」

良太郎さんは一度手を止めて、不意に庭を見渡しながらおっしゃいました。

「全て実母の手によるもの、ですわ。実母は大変に花を好きで、植生をよく知っていたのだと女中が申しておりました。実母に愛されて咲いた花ですから、それでより美しく栄えるのでしょう」

私はどこか他人事のようにそう言っ、良太郎さんと同じように庭全体を見渡しました。

実母のいた頃の庭を、私もまだ覚えております。それはそれは見事なもので、絵にして永久に保存できたならどんなにか良いだろうと、幼心にも思わせるものでした。

けれどそんな実母は早世してしまっ、花をあまり好きでない継母・総子さんと、それから私。花が限りを尽くしてしまっのではないかと思っこともありました。それでも誇れるほどに梅や他の花が咲くのは、偏に花を愛でる七枝屋の職人たちと、実母を偲ぶヨネがいてこそ。

しかし私がそれを口にすると、良太郎さんは「それだけじゃないですよ」とおっしゃるのです。

「花の美しさは伝播するんです。一人が美しいと、自然と周りも咲き誇る…そういうもんです」

「一人？」

「ええ」

良太郎さんはいつにも増して真剣に、剪定の枝を見つめたままこちらを振り向きませんでした。私は良太郎さんの物言いに人知れず微笑みました。顔がほんのりと赤くなるのを覚えて、暖かな気持ちに心を満たしていきます。

「…僕が住み込みをしている七枝屋の庭は、まるで箱庭のように小さくて、親方が仕入れた苗を並べるとすぐにいっぱいになってしまっんですけど…」

「…え？」

剪定の手を止めて、それでも尚振り向かず、良太郎さんは不意に口火を切りました。幸せな心持ちにひたっていた私は、何故良太郎さんがそうおっしゃったのか分からないまま、ただ一言問い返しました。

今日の良太郎さんはどこかいつもと違います。何を考えておいでなのか、ふと趣旨が少し異なる話をなさるのです。

剪定が花にとって非常に大事なもので、切る場所を間違っては逆に悪い影響を与えてしまうのだということは知っていました。

しかしそれにしても、何かにとらわれて心がここにはないような、とても大切なことに傾倒しすぎているような、そんな雰囲気さえ受けるのです。しかし良太郎さんはそれを承知していか、尚も言葉を続けます。

「それでも今年、親方の許しをもらって花を植えようと思うんです」

「…まあ…何の花を？」

私は良太郎さんの真意を探りながらも、とにかく尋ね返しました。良太郎さんがそうして欲しいのだということだけはわかったのです。すると良太郎さんは、今日の仕事のうちで初めてこちらに向き直って言いました。

「たった一本、椿の花を」

その顔にいつもの柔和な笑みはなく、初めて見るといえるほどに真面目な表情を浮かべていらっしやいました。

私は良太郎さんが何のことをおっしゃったのかすぐには分からず、その真剣な眼差しを見つめ返すばかりでした。しかしややあって良太郎さんの真意がそれと分かって、私の顔が火の付いたように赤くなるのを感じました。

？花を小さな箱庭に…？それは、その心は…。

すると一瞬にして頭がぐらりと揺れたのです。天と地が分からない

くなるほど、鼓動はドクドクとゆっくり大きく打ち鳴ります。

本当はそのまま良太郎さんのお言葉に、「はい」と大きく返事をしたかったのです。心がそうしたがっているが、とてもよく分かったのです。けれど喉の手前まで言葉が浮かんできたかと思うと、踏み止まって吸い込んだ息を止めてしまいました。

分かっていきます…分かっていくのです。私には祥助様の元へ嫁ぐ以外にないのだと。

けれどいつの時も私の心を和ませて下さったこの方の、そんな言葉を耳にしては、心が大きく揺らいでしまうのです。今何もかも忘れて良太郎さんの言葉に頷けたら、どんなにか救われることでしょう。

しかしどうして私に祥助様を裏切ることができのでしょうか。あの誠実な心根の、精悍な眼差し。全てを委ねたいと思ったことに偽りなどないのです。

それなのに…！

「…すみません、お嬢さん」

不意に良太郎さんはいつもの微笑みを取り戻して、枝切り鋏を帯にねじ込むと、落とした枝を拾い集めました。

その笑顔が…再び背を向けた仕草がどこか哀しげで、私の心を締め付けます。

私はそんな良太郎さんに何も言うことができませんでした。飲み込んだ言葉に呼吸はいまだ止まったままで、疼く心に目には涙が滲むのです。良太郎さんはそんな私を少しも責めることなく、ただいつものように剪定の後片付けを進めています。そして集めた枝を拾い上げて小脇に抱えると、そのまま振り返ることなく…言葉を発することもなく、私の前を後にしようとなさいました。

「待つて…待つてください！良太郎さん…！」

私は思わず良太郎さんを引き留めてしまいました。掛ける言葉など何一つ携えてなどおりませんでしたのに。

しかし良太郎さんは私の言葉に踏み出した足を一步でとどめると、

ややあつて口火を切りました。

「そういえば……」

良太郎さんはゆっくりと目線をこちらに向けます。私は未だ鼓動が大きいまま、泣きそうな気持ちを抑えることができません。

「あの椿の花は、元気に育っていますよ」

いつもと変わらない柔らかな笑みを浮かべて、良太郎さんはさりげなくそう仰いました。

「だから大丈夫ですよ？」と良太郎さんが再び背を押してくださいさつたのだと思うと、私は申し訳ない気持ちでいっぱいになり、「ありがとうございます」と涙ながらに呟くばかりでございました。

しがらみが家にあるのだと思うと、あれほど張り詰めるような気持ちだった女学校は、打って変わって気の休まる場所のように思われました。私の結婚は皆の知るところではありましたが、いかにせん祥助様を知ってはいても、良太郎さん知らぬ学友たちでしたから、その純粋な羨望の眼差しに、自分の恵まれていることを再確認する毎日でした。

痛む心も贅沢品と思えば、これ以上の慰めはないでしょう。

思えばあの宇治十帖の浮船も、同じような心持でいたのでしょうか。非の打ちどころのない、全く異なる性質の薫大将と匂宮の間で揺れ動いていた、ふらふら惑う小さな船。さしずめ私は咲くのを躊躇ったまま、風に吹かれる小さな蕾といったところなのでしょう。

あの日、私の心を初めて高鳴らせてくださったのは祥助様でした。私は本当に……本当に嬉しかったのです。あの甘く疼く心を愛しいと

すら感じました。しかし今をもって、私の心の多くを預けてしまったのは、他の誰でもない良太郎さんなのです。

まったく雰囲気の異なるお二人と、それから私。

宇治十帖の浮船は誰をも選べず身を投げて、助かった後も決して愛しい二人に逢瀬の橋を渡らせなかつたといえます。…それはまさに夢の浮橋。

ああけれど、私は一体どうしたら良いというのでしょうか。浮船のように、私はどこへも行けないのです。

私は蕾、椿の蕾。

このまま枝から離れてしまつたら、二度と咲くことはできないのです。現状は八方塞がりのように思えました。いつそ今すぐ種となつて、どこの庭にでも行けたなら、こんな私でもまた違った花を咲かせることができるのでしょうか。

私はそれを思いながら、重い足取りで女学校から帰っていたのでした。

「椿さん…！」

そんな風に心ここにないままに歩いていた私の耳に、不意にあの時と同じ声が聞こえて参りました。

遠くから近付いてくる足音と、低く響く美しいお声。間違つことなく祥助様…途端に足のすくむ思いがして、私はその場から微動だにすることができなくなりました。呼吸はひどく浅く早いものになります。

「良かった…やっとお会いできました」

そう言つて走り寄る祥助様に、私は一瞬にして救われた気がしました。詰まりそうだった呼吸はふつと楽になつて、徐々に視点も元に戻っていきます。これほどまでに懸命に会いに来て下さったことに、祥助様の変わらぬ御心を拝見したと思つたのです。

けれどそんな思いに反して、私はぱつと目を逸らしてしまいました。先日の御母堂様のお言葉がありありと私の頭に甦ってきたので

す。

頭の中から響いてくる声は、どのようにして遮るものなのでしょう。耳をふさいでは逆に大きく反響してしまいそうで、かといって頭を振つても出ていくことを知りません。ここ数日、私はその良い方法を探しては頭を垂れておりました。

忘れたくとも、どうしても忘れることができません。祥助様はそんな私をご覧になって、全てを察してしまったのでしょうか。とても哀しそうなお声で「：申し訳ありませんでした」と呟きました。

ああ：違うのです、そうではないのです。

私は祥助様のそのようなお言葉を聞きたいとは、露ほどにも思っておりませんでしたのに。

それならばいっそのこと、あの時の何もかもをなかつたことにして、いつものように優しく精悍な微笑みを見せていただきたいものでした。そうしたならば、この重い気持ちの全てを忘れることでもできたでしょうに。

「：今更母を許してくださいとは申しません」

祥助様は未だ低い声を保ったままおっしゃいました。

「けれどあれも、決して意地の悪い女ではないのです」

「：分かっております」

分かつてはおるのです。あの御母堂様の言葉の真意は、決して私個人を疎むものなどではなく、偏に祥助様を思うが故であったことは。

どうして子を思う母の大きな愛情に、私が敵うことができましよう。元より私にはそれに勝るものなど持ち合わせてはいないので。私はそう思うと、ひどく悲しい気持ちになりました。そしてこのように悲観的に考える自分に嫌気がさしてしまいました。

ヨネはよく？謙虚と卑屈は全く違うものだと申しておりました。謙虚は美德だけれども、卑屈は相手を困らせた自らを小さくしてしまう悪いことだと、常々私に言っていて聞かせておりました。どうせいつかは散るものと、タカをくくって咲く花よりも、散ることを知

ついでに尚、一時でも美しく咲こうとする花の方が、ずっと大きな実をつけるのだと言うのです。昔から消極的に考える私を、ヨネはずっと危ぶんでいたのでしょうか。

あの日祥助様とお会いして大きく高鳴った胸に突ったものを、私は今自らの手で潰してしまっているのだと感じて、ひどく締め付けられるほど心が痛んだのでした。その実の種が落ちて息づき、再び芽を出すのだとして、また同じ庭に実りたいと願うものでしょうか。私にはその答えが分かりませんでした。いえ、祥助様ならばその種をお拾いになって、再び花の咲くよう世話をしてくださいさるとは分かっていたのです。

分らないのは私の心。恥ずかしい話、私は自分の望むものを見出だすことが出来ずにいるのです。

私はあまりの情けなさに溢れ出ようとする涙を、必死になって堪えました。ここで泣き出しては、芯の弱い女と思われぬ。あの雄々しい庭を持つ伊集院家には、そんな女はきつと不要のものでしょう。ですから強くありたかったのです。私は泣きたくなかったのです。

それなのに…

「伊集院の庭は…」

不意に私から目を一瞬だけ伏して、祥助様は呟くようにほつりと口にしました。その言葉に私も怖ず怖ずと顔をあげ、祥助様を見遣ります。涙こらえる眉間に、強くしわを寄せながら。

「伊集院の庭は、とても武骨で華やかさに欠けていましたでしょう？」

思えばそのお言葉どおり、祥助様の家のお庭は松や竹といった常緑の、雄々しい木々で溢れておりました。おそらく武運を祈ったことなのでしょう。枯れることのない常緑の葉は、武家に常勝をもたらすのです。

これこそ日本庭園の神髄と思わせるほどに完璧な、花のない庭に

僅かな違和感を覚えつつも、或いはそんな庭も好きになれるものと思っております。私のような者が好きになっても良いものと。

けれど椿を拒む庭に、どうして芽吹くことができましょう。花は咲く場所を選ぶのです。選ぶからこそ、咲けない庭もあるものと同じながら。

「一寸の狂いもなく、常に同じくあり続ける堅い庭：けれど、そんな箱庭のような出来合いの我が家の庭にも今年、花が必要だと思つたのです」

ふと期せずして良太郎さんと同じような言葉を聞き、私は俯きかけた顔をもう一度上げました。この瞳に映るのは、未だ少し哀しげな、けれどその中にも優しさを秘めた祥助様。

私は祥助様の言わんとするところが分かりつつも、あえて同じように震える声を律しながら問いかけました。

「どのような花が…ですか？」

私にとってはそれが精いっぱいという言葉でした。すると祥助様は少し躊躇いがちに、慎重に言葉を選んでいるのが分かるようにおっしゃいます。

「そうですね…出来れば藤宮のお庭から頂戴できませんか？梅の香りのする、たった一本の美しい花を」

それを聞いた途端に、私の胸は強く締め付けられるものを感じました。

以前私に梅の香りをあててくださった、あの時の祥助様のお言葉が蘇ってきます。決して「椿」という名称を上げずとも、その意味合いが良太郎さんのおっしゃったことと寸分も違わぬものだとは分かっております。そしてあえて椿の花を引き合いにださなかつたことが、私と御母堂様の両方を気遣う祥助様の御心なのだ。

御母堂様があのようにおっしゃってさえ、尚私を伊集院家に迎え入れて下さるうということ、とても嬉しかったのも確かなことではあつたのです。けれどそれを思えば思うほど、良太郎さんの言葉の方が何度も胸中で繰り返されて、私は何も言うことができませ

でした。

そしてもうあれきり泣きたくないと思っていたにもかかわらず、
またぼろぼろと涙が零れ出たのでした。

第七章「椿の咲く場所」

最後の一本の花を生け終わると、私は小さくため息をつきました。「花の目前で憂きため息はよしなんし、椿さん」

池上先生はそう私を窘めて、「せつかく生けた花も枯れてしまします」と釘を刺しました。

良太郎さんと祥助様から同じようなお言葉を聞いてから数日、麗らかな花散る季節とは裏腹に、私の心は沈みがちでございました。

継母の総子さんは、何もおっしゃってはくありません。ただいつものように毅然としていらっしゃるばかりです。このような折、実母ならばどのようにしてくださったのでしょうか。そんな叶わぬ夢に虚しさが益々募ります。

「花はまこと正直なものでありんすな」

ややあつて池上先生は呟くようにおっしゃいました。

「ぱつと仄かに咲きほころびたかと思えば、もう舞い降り始めてしまつて。お天道様も恵みの雨も、何を断たれたわけでもないのに」

「？そつでしよう？？」と問い掛けるように、池上先生は小首を傾げてこちらをご覧になります。

「先生、同じ季節に花は二度咲きますでしょうか？」

私は未だ心の晴れぬまま、池上先生に尋ね返しました。花が落ちてきつてしまえば、桜は葉桜へと姿を変えます。落ちた花は二度と戻らず、また次の春を待つて新たな花が咲くのです。同じ枝先には戻れぬものと知るならば、花はどのような気持ちで散っているのでしょうか。

「まあ、おかしなこと」

そんな私の気持ちに反して、先生はにこやかに微笑みました。

「私にはまだ、花は枯れていないように見えます。むしろ、よく見れば未だ咲いていない遅咲きの蕾がありましたしょう？」

「遅咲きの…蕾、でございますか？」

艶やかな花びらに控えてはいても、ひっそりと蕾は隠されているもの。よくよく見れば、庭の満開を過ぎたはずの桜にも、丸い小さな蕾はあるのです。

啞然とした私に向かって、池上先生は優しく胸に手をお当てになりました。すると私の目にその古傷の残る小指が止まりました。

ずっと尋ねることを躊躇ってきた、その小指の傷痕。今なら聞けるでしょうか。私は一瞬目を伏せてから、ぐっと気持に勢いをつけて口火を切りました。

「池上先生、私：お聞きしてもよろしいでしょうか？その：先生の小指の：」

「：ああ、これですか？」

池上先生は胸に充てた手を持ち上げて、流れるような目線でご自身の小指をご覧になりました。

「椿さんは花魁の指切りをご存じでありましたか？」

「はい：昔、小耳にはさんだことがありました」

最初にその傷に気がついたとき、私は何も知らないままヨネに尋ねたのです。するとヨネは手招きをして私の顔を寄せると、そつと花魁の指切りの話を耳打ちしたのでした。

「そうですね。今の椿さんになら、お聞かせしたくもござりんす」
そう仰ってまた優雅に微笑みになると、池上先生はさらにきちつと座りなりました。

「この指：私がどなたに捧げようとしたのか、椿さん、想像できますか？」

池上先生がそう仰るので、私はしばし考えましたが、先生が元花魁だったことを踏まえれば、その答えは実に容易いものに思えました。

後に「花魁」と呼ばれるようになった、太夫という位。それは大変に高いもので、その呼び名の発祥が朝廷での五位朝臣の別称にあやかったことも含めると、一般の客にはどうやっても手の届かないものに違いないのです。

教養高く、和歌・連歌・碁や琴にも精通していた太夫。

池上先生はかつてその位の花魁でいらしたのですから、それに見合うだけの財と力を持った方だと考えたのです。

しかし池上先生にそれを申し上げると、先生は微笑みを絶やさぬままゆつくりと首を横に振りました。

「遊郭に妓夫きふという身分の働き手がいたことはご存じでしたか？」

「妓夫…ですか？」

「ええ、女を買うことなく、ただひたすらに遊郭で働く男性たちがいたのですよ。…私がこの指を捧げたかったのは、そんな妓夫の中のお一人でありました」

そしてしみじみとした表情で大事そうにご自身の指を見遣ると、池上先生は次のように当時のことをお話しになりました。

今からもう四十年ほど昔の話になりました。私は吉原で池上太夫と呼ばれ花柳界を闊歩しておりました。

幼いころは、それはそれは貧しく苦しい生活をして、その上で飛び込まざるを得なかった花柳界ではありましたが、華々しく豪華な世界は私にとって最後の居所のように思われました。世の女性の中には夜伽で身を売る花魁を蔑む人もあったでしょうが、花魁にはそれぞれ気高い誇りがあつたのです。

花柳界において花魁はただの人であつてはならないとは、遣手婆様に初めに言われた言葉でござりんした。花魁は俗世に生きる人に非ず、花魁は宵の夢に咲く花であれ…、そのことがいかに難しくまた、そのようになれた時にいかに女が美しくなるものか、それは花柳界に身を置いていなければ分からないこと。

私もその世界に生きる女でしたから、たとえ吉原という限られた

狭い世界でも、太夫という地位に登りつめて世を謳歌していることが大変に誇らしいことでした。拳句の果てには、世の男性など私を輝かせるための道具にすぎないとさえ、おこがましくも思うようになっていたのです。

けれど…逢瀬をともしたこともない一人の男性が、そんな私を変えたのです。

武骨で仏頂面、無口で何を考えているのか分からず、笑うことが苦手な…一人の不器用な妓夫。他の花魁たちは、そんな妓夫をさも無いものであるかのようにあしらいましたが、私はその妓夫が心に留まって仕方がありいせんでした。

世の女性が花魁を蔑むように、世の男性はいかに美しい容姿であっても、何人のも男と関係を持つ花魁を純粹に女として愛することは稀でしょう。

花魁は花魁、体の関係があつてこそ愛してくれる…宵の花になると決めた以上、私はそれでも構わないと思つておりました。

しかしあの妓夫だけはそのようなことはありませんでした。私が毎夜どのように過ごしているかを知つていても、それでも一途に私に仕えてくれたのです。いつも多言一つせず、私の体ではなく私の目をいつも強く見つめてくれました。

ああ、一体いつからそのまっすぐな眼差しをいとおしいと思うようになったのでしょうか。

私はこの生涯変わりようのない想いを妓夫に伝えたくて、ある夜小刀を手に妓夫のもとを訪れたのです。どのような身分の違いがあつてさえ、想う心に間違いはないのだと、妓夫に指切りをしようと思つたのです。

それなのに…

「…なりやせん！池芳太夫、それだけはなりやせんぞ！」

妓夫の声のするあたりは、既に小指の骨に当たるまで刃を突き立てた私の血によって、赤く染まつておりました。

「どうぞそ…どうぞお止めにならないでくださいませな…！この私の心、分かつては下さいませんか？！」

痛みを堪えながら、涙ながらに私は懇願しました。しかし妓夫は私の持つ小刀をはたき落して、その濡れた手を握りしめました。

「いけません！貴女は花魁…その意味が分かりませんか？！」

「身分が…この身分が邪魔と仰るなら、私は捨てる覚悟で…」

「いいや、そうではございせん、太夫」

妓夫はさらに強く手を握り締めて、大きく首を横に振りました。

「花魁は？花の魁さきかけ？…この吉原で何よりも先だつて美しくあらねばならん花が、その花びら一枚だに無暗に落としてはならんでしよう」

「花はいつか花びらを落とし、枯れていくものでありんす…！」

「いいえ、太夫。確かに花はいずれ花弁を落とすもの。けれど…」

一度言葉に詰まつてから、妓夫は私の瞳の奥を覗き込むほどに強く目線を合わせていいました。

「太夫、私は土です。花を支える土に他なりません。土は其処ら中に沢山あるもので、汚れておるのです。泥となって飛び跳ねれば、綺麗な着物をも台無しにいたします。花の魁は、そんな土の上に花弁を落とすしちやなりません。どなたかの掌の中に舞い降りるべきなのです」

そう言つて、とうとう妓夫は泣き崩れる私から指切りを受け取ることなく、きつくさらしを巻いてその場を後にしたのでした。…

「…私はあの時、あれほど愛したはずの妓夫を大変に恨みました。

太夫という地位にあつて、沢山の殿方から引く手あまたの毎日でしたから、私は自尊心を傷つけられた思いでいっぱいになったのです」

池上先生は目をお伏せになつて、さぞかし胸の痛む思いを抱えてそう仰いました。

「すると程なくして、その妓夫が病気で死んだと聞いたのです。途端に私の小指の付け根からプツンと音がして、それきり動かなくなつてしまいました。妓夫はすでに自分が先の短い命だと知っていた

のでありんしょう。それで私の指切りをお受取りにならなかつたのです。私がすぐに未亡人となって、返り花になるのを引き留めたかっただに違いありません。私はひどく自分を諫めました。まさかそんな優しい思いでいた人を恨むだなんて、愚かしいにもほどがあると涙滲む目元に手をおやりになつて、それを静かに拭うと、池上先生はいつものやさしい眼差しで私をご覧になりました。しかし私はその視線にお応えして、何か気の利いた言葉を言うことすらままありませんでした。

「この動かぬ小指は戒めなのです。いえ、もしかしたらあの時やつと指切りを交わせたのかもしれない。この指だけはきつと、既にこの世にないものになつているのでありんしょう」
それからすぐに、私は遊郭を去りました。池上先生はそよ風が花を少し揺らしたような儂いお声で話を閉めました。

花の魁は役目を終えて、人知れずひっそりと散つたのです。と。

「池上先生……」

私は思いを馳せながら、ただ一言添えました。

恋多きといわれた花魁の、燃えるようなたつた一つの恋の花。
その証が古い傷となつて残るものなら、私には何を残せるというのでしょうか。できるなら、私にもそういつたものが欲しかったのです。この思いを目に見えるものにできる、何らかの方法があるのなら。

「……けれど、椿さんが同じことをする必要はありませんよ」

池上先生は私の気持ちを先読みしてか、はつきりと言い切りました。

「わ、私は……ですか？」

「だって、椿さんは花の魁ではないでしょう？ 貴女はきつと遅咲きの花なのです。まだ蕾の、これから咲く花でありんす」

そう言葉にしながら、先生はゆっくりと庭の方をご覧になりました。その目に葉桜になりつつある桜の木が映っております。

「葉に囲まれて咲く小さな花は、その形も鮮明に分かるほど美しく栄えるのです。私にはその姿がまた格別に愛らしゅう感じられます。咲くのを躊躇う花も可愛らしいものでありんす」

池上先生はまた上品な笑みをお浮かべになつて、優しく私におっしゃいました。？ですから貴女はそのまま、背伸びをする必要はないのですよ？と、池上先生の切れ長の瞳はそう語りかけておいででした。

私は胸に暖かいものを感じてなりませんでした。実母が生きていたなら掛けて下さつたであろう言葉を、池上先生は遠回しにおっしゃつたのです。

花にまだ咲く余地があるように、道も断たれてなどいないのでしよう。道があるからこそ歩かねばならぬものを、もう駄目だと諦めて立ち止まってしまつては、いつまでも同じ場所から変わらないだけ。あの日あの時、何も出来ずにうずくまっていた私から、何一つ脱却することなど出来ないのです。

祥助様にも良太郎さんにも、私の方から歩み寄らなければなりません。枝を剪定しなければ良い花は咲かないように、花を摘まなければ生けることができないように、この胸の蕾は痛みをなくしては再び実をつけることなどないのでしょうか。

「蕾はまた少し膨らんだようでありんす」

先生はとても嬉しそうにそうおっしゃいました。私は「ありがとうございます」と深々と頭を下げ、御礼を申し上げたのでございました。

たった一本、椿の花を。

あの時良太郎さんが率直にそうおっしゃったことが、私にはこの上なく嬉しい事でした。

それまで結婚とは？藤宮の娘？としてするものであって、？椿？ではないのだと思ひ込んでおりました。いえ、それが正しいことだとは今も変わらぬ思ひであります。？藤宮の娘？として嫁ぐことが、父や松江叔母様、ひいては藤宮家全体にとってどれだけ重要なことなのかは、子供の私とて察するところなのです。その上相手の方が祥助様とあって、それ以上を望むのは贅沢、そもそもそれより上などあるわけはないはずでした。

けれど、柔らかな笑顔：ざんぎりの猫っ毛。

いつの日も、泣き出しそうな私の心を慰めてくださったのは良太郎さんでした。その方がたった一本の椿の花を望んで下さったのです。あの心持ちをいかに表現いたしましたでしょう。あれに勝るものなど、本当に見つからないのです。

「お嬢様」

ヨネは相変わらず静かに庭に佇んでいた私に歩み寄って、微かに私を呼びました。私は目に滲む涙が引くのを少しばかり待って、ゆっくりとヨネに向き直ります。

「…なんでしょう、ヨネ？」

「お嬢様、花は咲く場所を選ぶこともできますよ」

そう言うと、ヨネはふと視線を庭の隅へと向けました。私を実の孫娘のように思ってくれるヨネが何故そのように申したのか、私は彼女の言葉を不可解に思ひながらも、その視線の先を追いました。

「良太郎さん…」

思いがけず胸に秘めていた方の姿をとらえて、私の足は自然と彼の元へ急ぎました。

何かを決意したわけではありませんでした。ただ心が私を良太郎さんの元へと急かすのです。私はヨネに言葉を返すことすら忘れていました。ヨネが言った言葉の真意すら探ることもできないまま、

この胸は張り裂けんほどに切ない気持ちで溢れていました。

「良太郎さん…！」

私が息を切らして名を呼ぶと、良太郎さんは相変わらず眩しい笑みで「こんにちは、お嬢さん」とおっしゃいました。まるで先日何もかもがなかったかのように、いつもと変わらぬ柔和な微笑み。

ああどうか、そんなお顔をなさらないで下さいな。

せめてその微笑みに影の一つだに落としては下さいますか。

私は忘れたくなどないのです。あの時のお言葉を、私は……

「良太郎さん…あの、私…先日の…」

途切れ途切れに続ける私の言葉に、良太郎さんは少し首をかしげるようにしてただ優しく微笑みます。その胸中に一体何を思っておいでなのでしょう。私がすべてを言いきらないうちに、「あの時の椿の花ですか」と落ち着いた声でおっしゃいました。

「あれは恙無く育っていますよ。今は無理でも、いずれ花を咲かせましょう」

「い、いえ…違うのです…！」

私は顔をくしゃくしゃにしながら首を横に振ります。

胸からこの辛い思いがこんなにもあふれ出てしまいそうですのに、言葉はそれに反して喉の奥で止まってしまつのです。喉はまるで押しつぶされそうなほどに痛みます。私はそれを堪えながら、必死の思いで口火を切りました。

「良太郎さん…いけませんか?!あの…、あの私…っ…！」

?私と良太郎さんとはいけませんか?、そう続けるつもりでいながら、再び口は紡がれてしまいました。

どうして…どうしてその先を言えないのでしょうか?!

歯痒い思いに体の奮えさえ感じます。

「心配には及びやせんぜ。あの椿はお嬢さんのものですから、必ず返しますんでさ」

「り…良太郎さん…」

もはやこれ以上何を申しましょう。はっきりと分かりました…、良太郎さんは先日のご自身の言葉に次ぐ私の返事を拒んでいらつしやるのです。

良太郎さんはきつと、何もかも分かかっておいでなのでしょう。私の思いも、私の立場も。すべてを踏まえたと上で拒むのです。

財閥の一人娘と、まだ駆け出しの植木屋の弟子。

この溝がどれだけ深いものかというのでしょうか。風に舞う花びらなら、どのような高い生垣も風に乗って越えていくというのに。

「…すみません、お嬢さん」

何も言えなくなってしまった私の耳に、ふとあの言葉と同じくらい神妙な良太郎さんの声が聞こえてきました。

「お嬢さんの大事な花を、僕が預かることになってしまつて…」

私は思わず真つ赤な顔をあげました。とても哀しげで、とても柔らかな声が、私の頑なな心に染み渡つてきます。

「本当は…花の咲く前にお返しするつもりでした。花が咲いてしまつと、手放せなくなつてしまつから…」

良太郎さんは自嘲的にほつりほつりと呟くと、そのまま天を仰ぎました。

つがいの小鳥が、その目線の先を樂しげに飛んでいきます。それを見ると良太郎さんは少しだけ微笑んで、もう一度私を見てくださいました。いつもと変わらぬ柔和な笑みが、私の心を締め付けます。

「…ごめんなさい…ごめんなさい、良太郎さん…」

こんなになつてまで、貴方を選ぶことが出来ない私で。

いつそしがらみを全て捨て去つて、ただの椿の花となれたなら、どんなに幸せだったことでしょう。

私は涙を滲ませて、胸の辺りで重ねた両手を固く握りしめました。もはや心はボロボロで、傷付いて傷付けて、一体何が正しいのかさえ分からなくなつてしまいました。自由を好む良太郎さんがおつしやつたように、私も自由になれたなら…

「お嬢さん、以前僕は自由に咲く花が美しいと言いました」

良太郎さんはそんな私から一瞬目を離して、優しい声ではつきりとおっしゃいました。私はそのお声に、固く閉じていた目を開けま

す。「だからお嬢さんが、今ここで伊集院の若旦那を選ぶのも、僕は一つの自由なんだと思いますよ」

その変わらぬ思いを示すように、良太郎さんは私に向き直って今まで以上に優しい満面の笑みを浮かべました。

私はそのお言葉に何もかも救われたような気持ちがして、どっと涙が溢れたのを感じました。しかしそんな大粒の涙に反して私の心は大変に穏やかで、口元にはうつつすら笑みさえ浮かぶのです。

私は「終わった…」と思っておりました。ああ、これで良太郎さんへの想いは最後なのだと。

けれどそう思ってさえ、尚笑みを浮かべることができたのは、良太郎さんがどのような決断をしたとしても私を美しいと言ってくれたからでした。私もそんな良太郎さんの自由なお志を、生涯忘れることはありません。

この世に常世の花があったとしたなら、それはきつと互いの心に咲いた変わらぬ思いのことを言うのでしよう。

良太郎さんはそんな私を見ると、安心したようにまた微笑みになって、何もおっしゃらないまま片付けた枝を抱えてその場を後にしようとなさいました。互いに少し俯いて、その顔を見合せないように。

けれど良太郎さんがすれ違ってすぐに、不意にばらばらと枝の落ちる音を聞いたかと思うと、背後からふわりと体を包み込まれました。あまり背の高くない良太郎さんの猫っ毛の先が、私の耳をくすぐります。袖をまくった腕が私の前で交差して、暖かな掌が両肩をしかと抱えています。

私は驚きのあまり、直立不動のまま何も言うことができませんでした。

「お幸せに、お嬢さん」

そう小さく呟いて今一度強く私の体を引き寄せますと、それからすつと離れていってしまいました。

良太郎さんが落ちた杖をもう一度拾いあげて藤宮の門まで歩いて行った後にも、私は体に残る暖かな感覚に、暫く微動だにすることもできなかつたのです。

美しく咲けども花の、むじょうにも散るらむ。

無常だからこそ、花は何度でも美しく咲き誇ることが出来るのです。もし花があのまま常にあつたなら、私の涙はこうして止むことはなかつたでしょう。無常とは守りたいものであると同時に、自由そのものでもあるのです。

私はお二人のあの言葉を同時に噛み締めて、我が家の庭で祥助様をお待ち申し上げておりました。卯月の今は下旬となつて、ぼかぼかと暖かな初夏の陽気に心が和みます。私の心は大変に落ち着いておりました。先日まであれほど祥助様にお会いすることを恐れていたことが、まるで嘘のように晴々としています。

？花は咲く場所を選ぶこともできる？…あの日ヨネが示してくれた別の道に首を振って、あるべき庭を選んだことに、後悔は微塵もありませんでした。ヨネもそれを察しているのでしょうか。ただ何も言わずに、私の傍らに控えています。

「…お嬢様、お見えになりました」

ややあつて掛けられた言葉に、私はゆっくりと振り返ります。葉桜の下、未だハラハラと舞い落ちる花びらの向こうに、待ち望んだ方の姿がありました。

「祥助様」

私がお呼びしますと、祥助様は緊張した面持ちでこちらに歩み寄りました。祥助様のお考えになつてゐることは少しだけ、私にも分かります。ですから私は祥助様に微笑んで見せました。いつの日も私を気遣つて下さつた祥助様に、私も同じようにして差し上げたかつたのです。

「こんにちは、椿さん」

「こんにちは、祥助様。今日は突然に御呼び立てして申し訳ありません」

「いえ、滅相もない。またこのように庭園にお招き頂いて、とても嬉しく思います」

そう言つて祥助様は、少しだけ弱々しい笑みをお浮かべになりました。そんな上背のある祥助様を覗き込むように、私はまっすぐに見つめました。

「本来なら桜の満開の頃に、この庭にお招きしたいものでした。今はもう葉桜になつてしまいましたが、このような桜もお好きですか？」

「そうですね…、これもまたおつなものと感じます」

そのお言葉に私はにこりと笑みを浮かべて、「少し庭を歩きますよう」と申し出ました。ヨネは私たちを送り出すように、そのままの位置で深々と頭を下げました。

思えばこの庭を、祥助様と一緒にこんなに落ち着いていられるのは、初めてのことでした。花はこれほど美しかったものを、見上げずにいたことが大変に惜しく感じられます。

けれど来年もその次の年にも花は咲くもの。この次の折には心行くまで見上げようと思うなら、今は花の赴くまま、散らしてやるの

が優しさというものでしょう。

「花の咲く頃は、祥助様とお会いした日のことを思い出します」

私は来年の満開の桜をまぶたの裏に描きながら、そう申しました。それは梅の香に私を重ねて下さったことと同じように、花の咲く胸躍る様が祥助様を思い起こさせるのです。

まだありありと覚えていきます。あの高鳴る胸の感覚を、最初に感じたのは間違いなく祥助様でした。そしてそれを思い出させてくださったのは良太郎さん。

お二人との出会いがどれだけ大切なものであったか、今更ながら再確認するのです。

「覚えておいでですか？あの日、祥助様がお尋ねになったこと」

「ええ、勿論です」

「私はあの時、結婚とは女の幸せだと申し上げました。それは今も変わらぬ思いであります」

そしてそうであって欲しいと強く望むのです。花が何の束縛を受けずに、自由に咲き誇るように。

「けれどあれは私の言葉ではありませんでした。あの言葉は女中のヨネが私に言っただけの言葉です。私は言葉の意味を何も分かってはいなかったのです。？結婚？が女の幸せなら相手は二の次で構わないと、きつと心のどこかで思っていたのでしょうか。とかく私も薄情な女だったのです。しかし…」

たった一本、椿の花を。

？結婚？という言葉にとらわれて現を抜かしていた私に、良太郎さんは真に人を想うことを教えてくださいました。今を以って尚、そんな良太郎さんを思うと胸が締め付けられます。どこかぽっかりと欠落したものを感ずるのも確かなのです。しかしそれを失ってさえ、多くのものを得たと考える私がいるのです。

「あの方は…良太郎さんは、純粹に？椿？としての私を好いてくだ

さいました。私はその時初めて、人を一途に想うことを知ったのです。それまでの私がいかに小さなものであつたか…、あの方にお会いしなければ今も分からないままだったでしょう」

あるがままを受け入れて、自由であることが美しいと、いつも微笑んでいらつしゃいました。いずこの庭を選んでも、花は花、少しも変わりはないのだと強く請け負ってくださいました。

そんな良太郎さんを想う気持ちを、私は生涯忘れることはないでしょう。

「行くのですか？あの…植木屋の青年のもとへ」

祥助様は躊躇いつつも、核心についてお尋ねになりました。哀しげな切れ長の瞳が私をまっすぐに見つめます。

「いいえ」

私はゆっくりと、そのお言葉に首を振りました。

「いいえ、私はそんな良太郎さんを知つたからこそ、同じような心で祥助様に一生を添い遂げたいと、そう思つたのです」

私は揺るぎない瞳で、同じように祥助様を見つめました。

最高の幸せなど、この世には存在しません。けれどこれこそが私にとつて、円満の幸せなのです。

どうして誰かの幸せを奪つておきながら、自身に幸福が訪れましよう。それは私にも、祥助様にも、良太郎さんにさえ等しく言えることなのです。

良太郎さんはちゃんと分かつておいでだったのでしよう。自らは身を引いて、相手の幸せを感じることもまた一つの幸せなのだ。その上で私の背をそつと押ししてくださいだったので。

私はそんな良太郎さんの優しさを胸に抱いて、いかなる時も私にまっすぐな祥助様の誠実なお心に応えることが、真の幸せなのだと思わずにはいられませんでした。

ああ、そのことの何と有り難いことでしょうか。

普通の人がどちらかを無くしてしまうものを、私は二つとも手にすることが出来たのです。もしも一方が祥助様でなかったら、或い

は良太郎さんでなかったら、有り得ぬ幸せだったことでしょう。

「…よろしいのですか？我が庭は椿の花を咲かせずにいた土地」

辛い思いをさせてしまいうくらいなら、最初から植えぬことを望むのです。

「何をおっしゃいます。あれは言葉のあやと、そうおっしゃったではありませんか」

私はあの時は辛く聞こえたお言葉を、希望を添えて口にしました。祥助様は未だ不安の面持ちでしたが、次第にそれも晴れていくように見えます。いずこの庭でも花は花、そう…自由に咲くことが出来るなら。

「だから…椿でなくてもいいんです。藤の花でも梅の木でも、桜でもよいのです。あの剛健なお庭に、藤宮の花を一輪、添わせては頂けませんか？」

どうぞそのおそばに、「椿」という名の花をわたしを召しませ。

そう祥助様にお答えを委ねますと、小首を傾げるように祥助様のお言葉を待ちました。

今までいつも心に抱えていた「所詮…」などという卑屈な気持ちは微塵もありません。清々しい思いが心いっぱい広がっているのです。

祥助様もそれがお分かりになってか、最初は呆気にとられた表情をなさりながらも、段々とそれを綻ばせていきます。

「是非そう致しましょう。椿さん、貴女に似合う庭になるように」

祥助様は安心したように、いつもの精悍な微笑みを取り戻しますと、私の手をそっと取ってくださいました。私も「はい」と確かなお返事を返して、祥助様の瞳の奥を見つめます。

それは葉桜の名残花がはらはらと散る卯月の終わり、この年一番の麗らかな日のごさいました。

？

第八章「花は戻りて」

大正三年水無月の大安に、私は伊集院家に嫁いでいきました。

総子さんは「ヨネも伴なわせてはどうか」とおっしゃいましたが、私はそれを拒みました。決して自分に敵しかった訳ではありません。ただ藤宮の家に、実母・百合江のいた証を残しておきたかったので。総子さんは「そうですか」と、相変わらず感情を表に出さずに一言おっしゃいましたが、その後小さく「貴女ももう大人になったのですものね」と呟きました。

「おかあさま……」

「貴女のお義母様は伊集院家にいらっしやいます。私は今日からはただの女です。……いいえ、慰めは不要です」

「……では、総子さん」

私がそう呼び留めると、総子さんは驚いてもう一度私を見遣りました。私は今まで無理に「お継母様」と呼んでいたよりも、素直にお名前でお呼びした方がどこか落ち着く思いがしました。

総子さんはきつと最初から？お継母さま？ではなかったのです。私にとっては憧れにも似た年上の女性だったのでしょう。その方が私を？大人になった？と仰ったのです。私はとても嬉しかったのです。他の誰でもなく、総子さんの口から聞いたからこそ私の心に大きく響いたので。

「ありがとうございます」

私が腰を折りますと、総子さんは少し切なげな目線で私を見つめてから、何も言わずにご自分のお部屋へと戻って行きました。

あとから聞いた話では、総子さんは自室で声を押し殺して泣いていたそうです。

天涯孤独……鈴なりになって咲く花には決して分からねぬその心。総子さんにとっても、私は継子とはまた違ったものだったのでしよう。婚礼の日、私は実母が召していた白無垢で身を飾りました。父や

ヨネはそれをどう御覧になったのでしょうか。かつては嫁いできたものをこうして見送ることに、ヨネは小さく「長生きはするものじやありません」と呟きました。

私より少し背の低いヨネの姿は、綿帽子の影から常に覗きます。ヨネは私にとつて、母とも祖母とも違う存在でした。彼女の目線が絶えず伏してあったのは、その目が涙に赤くなっていることを隠すためだったのでしょうか。

私はそんなヨネの手を、別れ際にそつと取りました。相変わらず暖かく、そして沢山のしわが刻まれた愛しい手。

それはこんなにも小さなものだったのでしょうか。

「お嬢様、末永くお幸せに」

「ヨネ……」

とうとう手は離れ、私は輿入れの籠に乗り入れました。そして小さな窓からなおも振り返ります。ヨネはいつものように深々と腰を折りました。一度だに顔を上げず門前に立って小さくなっていくそんなヨネの姿に、私は籠の中でも何度も涙を拭ったのでした。

伊集院家は最初こそ辛いものを感じましたが、それもほんの一時のこと、幼いころから男兄弟のなかにあつたお義母様も、初めての女性の家族に次第に私を本当の娘のように思ってくださいるようになりました。

椿は依然武家にとっては不吉な花。

けれど明治十年に西南戦争が終結して以来、内戦の鎮まつた世相に、それも薄れつつある概念なのでしょう。未だその庭に椿の花はあらずも、私が輿入れしてからというもの、お義母様が頻繁に椿油をお使いになつていることが、大変に嬉しく感じられました。

祥助様はそんなお義母様を見て口元に微笑みを浮かべながら、「母もあれで繊細ですから、素直に気持ちを伝えることが出来ないのですよ」とおっしゃるのです。

よもやあの日の庭で聞いた会話を、互いに忘れた訳ではありませんでした。だからこそ一線を引くものも、分かち合えるものも共にあったのです。

真に穏やかな、安寧の日々。

かつて泣き出したあの帰り道で、良太郎さんが「大丈夫ですよ」と言ってお下されたことが、幸せの内に脳裏をよぎります。

七枝屋は私が嫁いだ後も、変わらずに藤宮の庭を整えておりましたが、旧家へ里帰り出来ぬうちは道すがらお姿を遠くから拝見するだけでした。しかしそれで良かったのです。自由に咲く花を愛でる良太郎さんがまた、自由にのびのびと過ごしていらっしゃることが、私にとつての幸せでもあったのです。

ずっとこの時が続けば良いのにと、心底願いました。

しかし…

「戦…ですか？」

ある日お勤めからお帰りになった祥助様が、私に声を潜ませておっしゃいました。この太平の世にあつて随分久しく聞かなかつた言葉。私は祥助様から受け取った上着を持ったまま、動きを止めて尋ね返しました。

「そうは言つても外国での話だけでもね。そこに我が国も関与していきそうな風潮なのだよ。」

「祥助様も…戦場へ赴くのですか…？」

「いや、それは分からない。だが省が指揮をとることになるだろうから、帰れない日もあるかもしれない。すまないが、堪忍しておくれ」

そう言われて私は事情をよく知らぬまま、ただ「はい」と頷きました。

それは同年文月の、俗に言う第一次世界大戦。

それを聞いたのが、葉月の終わりのこの日のことでした。
そしてそれから程なくして、道々で時折お見かけすることのあつた良太郎さんの姿を、とんと見ぬようになったのでした。

秋の草花が奥ゆかしく咲いて虫の声が満月に映える夜も、霜がおりる凍える夜も、この年ばかりは独りで過ごすことが多うございました。

祥助様はご自身がおっしゃったように、お勤めで省からお帰りにならないこともあり、お会いするたび心労の重なっていくご様子に心配が募る毎日でした。祥助様はそれでも毅然としていらして、私に疲れを見せぬように配慮してくださいました。けれどもそのお心遣いも胸を痛めるものならば、いつそお疲れの具合を全て知ってしまったって癒して差し上げたいと、よく思つたものでした。

私は庭に立つて、小さな木を見つめました。輿入れの際に植樹した梅の若木は、この冬花を付けるでしょうか。もしこの梅の咲いたなら、その芳しい香りが祥助様のお心を和ませるでしょうか。

私はそれをひたすら願つておりました。

「椿さん、お体に障りますよ」

不意に縁側からお義母様にそうお声を掛けられて、私は振り向き腹部に手を充てました。

私には既に祥助様との子が宿つておりました。

十月十日、それに違わず生まれてくるなら、ちょうど桜の咲く頃になりましょうか。特有の体調不良は随分成りを潜めていましたから、私はよく庭に出ておりました。いずこであるかと、庭に寄せる思いは良太郎さんに繋がるものでしたから、私の最も落ち着く場所だったのです。

「お心遣いありがとうございます、お義母様。けれど体は随分楽なのです」

「ああ…それでも師走の冷たい風は体に毒ですよ。お上がりなさいな」

私はそのお言葉に素直に「はい」と頷いて、縁側へ上がりました。するとその直後にお義母様は何かに気がついて、「あ」と私に振り返りました。

「そういえば椿さん、里帰りはいつなさるの？大晦日おおつごもりから年明けは大変に忙しいものですから、この師走の早い時期に一度お帰りになつてはいかがかしら？」

そう言われて私が答えにあぐねていきますと、お義母様は「これからますます身重になるのだし、今のうちにお父上にお会いするべきですよ」と付け加えました。確かにこれ以上日を重ねては、旧家へ帰るのも至難の業。父や総子さん、とりわけヨネに、この身に宿った幸せを見せたいものでもありません。

「祥助さんには私からお伝えしますよ。あの人も貴女の体を気遣つてやみませんから、一度旧家に帰って心落ち着けてくるのだと知れば、いくばくか安心するでしょうし」

「そうですね…。それではお言葉に甘えます」

私はお義母様のお心遣いを受け入れて、ほぼ二つ返事にうなずきました。お義母様の仰るお言葉に、私の脳裏には祥助様のお顔が浮かびました。あちらにもこちらにも気遣つてしまふ祥助様のご心労は、きつと大変なものでしょう。

私はその夜、早速文をしたためました。旧家へは数日の内に帰省する旨を一通、そして不在の祥助様にも同様に一通。どうぞ私をそのご心配の荷車から、一度下してくださいな、と。

年も暮れかかる師走の寒さは、他のどの月にもましてひどく身に染みます。

私は両家の承諾を得て、かつては見慣れていた道を人力車に乗って見ておりました。この道は女学校から帰る道。結婚と同時に去った女学校は、今はどのようになったことでしょう。尤も当時既に複数の学友に見合いの話がありましたから、もう幾人かは私と同じように女学校を去ったのかもしれませんが。

懐かしい道、懐かしい胸の痛み、懐かしい笑顔。

ああ…あの方は…良太郎さんは、今頃どうしているというのでしょうか。

毎日祥助様のお具合もさることながら、私は姿の見えない良太郎さんも気掛かりでなりませんでした。無論祥助様にそれを問うことは、大変に致しかねるもの。

それでも祥助様には私の思うところがお分かりになったのでしよう。庭の木を見上げていた私にそっと、「巷の若者が戦場に赴きました。今は南洋の島々か、中華民国の一端か。けれどいずれ戻りましょう。」と、一般には知られぬところを教えてくださいました。未だ戻れぬのでしょうか。尚も外国での戦は続くのでしょうか。年が明ければすぐに春になって、花は再び咲き誇ります。私にもちゃんと春の訪れの予感がありますのに、花が一輪足りないだけで満開になどなれぬのです。

「奥様、着きましてございます」

ややあつて車は藤宮の門前で止まりました。私は腹部を庇いながら、前傾になった車から踏み台を使って降りました。家を離れてまだ半年というのに、その門前のなんと懐かしいことでしょう。時間を見計らって迎えてくれたヨネの変わらぬ姿に、私は彼女の手を強く握りました。

「お嬢様、その後お幸せのこととお喜び申し上げます」

「ありがとう、ヨネ」

私はその言葉に再び腹部に手を宛てがいました。今や幸せは目に見えるものとなって、近いうちに生まれいでるのです。愛しい方との間にこうして結晶ができたことに、私は女の幸せを噛み締めてお

りました。

「では奥様、明後日にお迎えに上がります」

「ええ、お願いします」

そうしてぺこりと頭を下げた車屋を見送って、私はヨネとともに懐かしい旧家の門をくぐりました。

庭は金木犀の残り香も消えて、既に冬の様相でした。常緑樹だけが寂しげにくすんだ緑色を見せています。間もなく椿と、それから梅と。あれから一年が経つのだと思うと、胸中は大変に感慨深いものでした。

「お嬢様、本日はちょうど庭の冬支度の日でございます」

不意にヨネはほつりと口にしました。私は瞬時にそれと察して、大きく脈打ったのを感じました。

「で…では、あの方が…？」

そう尋ね返しますと、ヨネは目線を落としてから庭の一角を指し示しました。見慣れて懐かしい「七」の文字、少し前掲姿勢の後ろ姿は、未だ健在の七枝屋の老頭領でした。私はそれでも引かれるように小走りで向かいました。

七枝屋の頭領ならば何かご存知ではと、心が急かしていたのです。

「頭領」

私の呼び掛けに、頭領は筵を巻いていた手を止めて振り返ります。

「や、これは椿お嬢さん。随分ご無沙汰で」

そして深々と頭を下げたから、私の体の様子に「恙無くお幸せのようで、何よりです」と付け加えました。

「変わらず藤宮の庭を手入れして頂いてありがとうございます。…その後はいかがですか？」

「なに、大分アタシも年が辛くなりましたな。アタシにやここが最後の仕事場になりやしよう」

「……良太郎さんは、どうしておいでですか…？」

私は控え目に問いかけました。

本当はその答えを知ってはいたのです。未だ戻らぬ優しい人、今頃どこになど誰も知る由もないのに。

頭領はふつと小さく溜息を交えますと、そのまま私に背を向けてもう一度木に直りました。

「あいつあまだ出掛けたまま戻らねんで。師走は正月飾りの準備で忙しいから、それまでには必ず戻れと念は押したんですがね」

そして微かにその肩を震わせて、「まったくあいつあ間の抜けるのがいけねえ」とおっしゃいました。私はそれ以上何も言うことができませんでした。

ああ…どうかあの方の無事に戻らんことを。

そうしてぎゅつと固く瞼を閉じました。その中を柔らかく微笑んで振り返る良太郎さんの姿がよぎります。

「大丈夫ですよ」…今最も聞きたいその言葉を、私は胸が痛くなるほどに強く願うしかなかったのです。

年が明けて睦月、正月休みもそこそこに、祥助様はひどく忙しくお勤めに出掛けておりました。幸いだったのは、そのお仕事がかたびの戦を終結させるためのもので、中華民国へ出す筒条を取り纏めているものだということでした。明治の内戦を知らぬ私には、この戦は大変に長く辛いものでございました。祥助様のおっしゃる筒条で戦が終わったなら、駆り出された若者たちも帰ってくることでしよう。

私はその中に良太郎さんの姿があることを、幾度も瞼の裏に描き

ました。そして想像してみるのです。「どうも帰り道に手間取った
んでさ、お嬢さん」と、あっけらかんとした憎めぬ笑顔を浮かべる
ことや、新春の日差しに茶色いざんざん頭が揺れることを。

子を宿した体は日毎重くなり、腹帯でさえ窮屈に感じます。私は
自室で椅子に腰掛け、繕い物をしておりました。その一目一目が我
が子のためであり、人形に着せられそうなほど小さなべべに我が子
を思い浮かべるのでした。

まことに人を思う心とは、尽きることを知りません。こうしてま
だ会わざる我が子さえ愛しく思うなら、一目お会いした方へのそれ
は比べものにならぬもの。そして会えずにいる時間が長ければ長い
ほど、募っていくものなのです。

私の心に募ったものは、不動の山にすら等しく感じられます。し
かしそれは一種の恋愛感情とはまったく異なるものでした。会えば
思わぬものを、会えねば考えてしまうもの。もしこれが良太郎さん
と祥助様とが逆であっても、きっと同じことだったのでしよう。

ただ偏に無事を祈って、再び相まみえることを願う日々。

誰もが等しく感じるであろう虚無感を、私はこの時抱えていたの
です。

「奥様」

不意に年若い女中に呼ばれ、私はぼんやりと手を止めていたこと
に気がつきました。

結婚して尚、深く物思いに耽つてしまうところは変えられませ
んでした。それでも祥助様が「そんなところも良いと思います」と受
け入れて下さったことが、また一つ私を支えてくださっていたので
す。私はこうしてぼんやりとしてしまう度に祥助様のお言葉を思い
起こして、ほんの少しの自己嫌悪と、胸いっぱい広がる幸福を思
うのでした。

「はい、どうしました？」

私が振り返って尋ね返しますと、女中は怖ず怖ずと縁側から顔を

覗かせました。

「あの…門前にお客様がお見えになっていらつしやいます」

「まあ…それは困ったわ。祥助様はまだお帰りにならないようですし…」

ちよつと昨日省から遣いが遣されて、祥助様のお言付けを聞いたばかりだったので。祥助様がお勤めに出た睦月の十日から、今日で三日が経ちます。「自分が帰らぬうちは、世を太平へ向かわせているということですから、身重の体に心労を重ねぬよう」、それが祥助様との約束でした。

しかし女中は僅かに首を横に振って言うのです。

「いえ、それが奥様死てのお客様なのです」

「私に…？」

よもやすぐにそれと思い当たる節はなく、私は小首を傾げました。藤宮からの遣いでしょうか。けれど、このように何の前触れもなく訪れてくるとは思えません。

「一体どなたなのですか？」

私は一瞬の思考すら齒痒く、すぐに尋ねました。

「はい、それが単身瘦躯の職人らしき男性でして、奥様にお返ししなければならぬものをお持ちしたとか。…これをお預かりしました」

そう差し出されたものを見て、私の鼓動は大きく高鳴りました。

それは小さな苗木、頼りない枝に一輪咲かせた椿の花。

この椿もきつと咲きます。

そんな懐かしい言葉が頭をよぎります。

「そ、その方はまだいらつしやる?!」

私があまりに高ぶつてそう聞いたので、女中はひどく驚きながら「は…はい」と頷きました。私は女中から椿の苗木を受け取って胸に抱きますと、重い腹部を気遣いつつ門前へ小走りで向かいました。

分かっていきます…分かっていくのです。

この時をどれほど待ったことでしょうか。

もはや目に浮かぶあの方の笑顔が、真の記憶のものなのか、何度も想像したものなのか区別がつかぬほど、沢山浮かんでいきます。涙がじわじわと滲んで目の前を霞めていくことが、ひどく煩わしくも感じられるほどなのです。私は玄関まで至りますと、置いてあった草履をつっかけて、そのまま庭を走り抜けました。

空は明るく清々しい新鮮な空気…けれど、私はそれを一度も感じることありませんでした。はたしてこの時に呼吸をしていたのかどうかすら疑わしく思えてきます。私の心にはただ一つ、あの頃を思わせる甘い痛みがあったのです。

「良太郎さん…！」

私は今にも泣き出しそうな顔で、門から出てすぐに名を呼びました。そこには見慣れた植木職人の羽織を着て、塀越しに庭の木々を見上げている一人の男性の姿がありました。

そうして振り返る柔和な笑顔、少し痩せて、落ちない汚れのついた頬。それでどうして見間違えることがありましよう。その色素の薄い猫っ毛が、想像通りに新春の光に輝いているのです。

「どうもお久しぶりです。帰り道に手間取ったんでさ、お嬢さん」
何度も頭に描いたのと同じ言葉のあとに、良太郎さんは「遅くなりましたけどお約束通り、椿の枝をお返しに来やした」と、すっかり開花してしまつた苗木に苦笑しながらおっしゃいました。私はそのお言葉にポロポロと零れだした涙を何度も拭くと、顔をあげて良太郎さんをまつすぐに見つめます。

「いいえ、花が咲くのがずっと楽しみでした」

そうして互いに微笑みかける、大正四年の睦月のこの日、胸元の椿の花が風に揺れておりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5804/>

箱庭に花

2011年5月4日16時40分発行